

「新訂万国全図」の主要資料アロウスマスの原図について

船 越 昭 生

【要約】 著者はわが国近代地理学の草創を一八〇〇年代のはじめにみとめるものである。この時期を代表する作品が「新訂万国全図」であって、漢・洋の諸資料をひろく搜集し、加うるにわが国本土についての科学的な知識や当時北方のテラ・インコグニタの地理的知識の獲得のために挑戦していた探險結果を包摂するものであった。それは漢・洋の側からの知識の受容とともに、日本の側からこれに主体的に参与しうる「地理的ランガージュ」をふくんでいた。本稿では「新訂万国全図」の主要資料となったアロウスマスの原図を、わが国に現存する同図の日本北辺・オホーツク・カムチャッカの部分の訳図と説明にみる地図的要素から探索・立証し、その原図の刊年を考えることを筋としながら、明治維新より半世紀以上まえにすでにわが国の学者が世界に関するすばらしい「地理的ランガージュ」を成立せしめていたことを明かにしたく考える。

史林 六二巻一号 一九七九年一月

はじめに

かつて筆者は、「鎖国日本にきた康熙図」なる一文を草して、わが国における近代地理学の草創を、一八〇〇年代の初頭に求めたことがあった^①。それは、すでに、中国やオランダ・ロシアにおける地理的知識の洗礼を受けたこの方面の研究が、伝統的なわが国の地理的知識を、広汎な資料の蒐集とその批判・理解の上に立ち、さらに、「親履実測」によって北方の未知の土地の地理像を鮮明にした動きを、近代科学としての地理学に外ならぬ発想・精神構造、合理的・実証的

方法によるものとなし、それにふさわしい表現の手段をとって、報告を行ったと評価した。^②

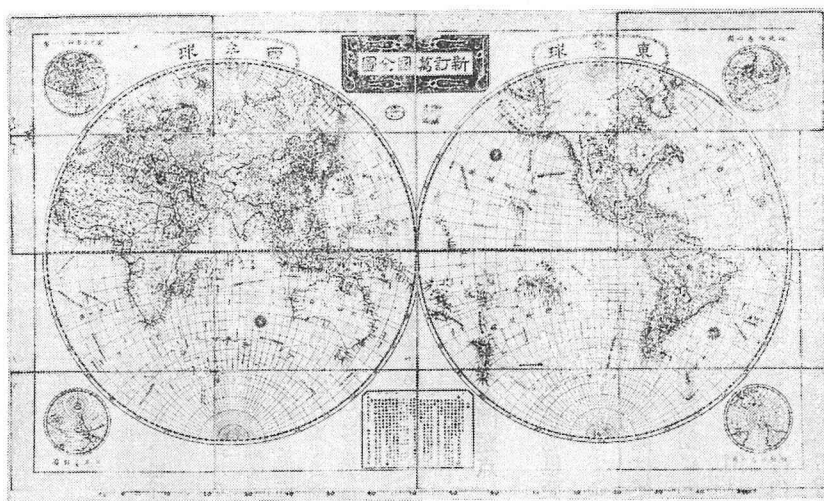
それは、高橋景保・間重富・馬場貞由を中心とする天文方に拠った研究集団と間宮林蔵・松田伝十郎・最上徳内・近藤重蔵等の北方の探検家によって担われた諸活動が、その基礎となっていた。

それらの成果の頂点に立つのが、論文としての高橋の『北夷考証』であり、探検記としての間宮の『東鞆紀行』であり、また、地図としての間宮の「北蝦夷地図」、高橋等による「新訂万国全図」の編集であり、いずれも現在に至るも、なおその学問的価値を失わぬわが国地理学のモニュメントである。

それは、また高橋至時や間の指導を受けた伊能忠敬の日本全土を覆う測量が、まさに完成しようとする段階にも相あたる時期に外ならなかった。^③ 筆者が、一九世紀初頭におけるこれらの業績活動の中に、近代地理学の前駆・草創あるいは、成立をみようとするとする主張は、必ずしも的是なものではなく、シーボルト事件以後の壊滅的な段階からの再出発時点における地理学の業績と比較してみるならば、はるかな隔りをもつものだからである。

筆者は、世にいわゆる「明治の地理学」に対して、「文化の地理学」の存在を提唱するものであり、それは、その合理主義・実証主義とその顕現としての手続・表現をふくめて、近代地理学の名に恥じない内容を有していた。それはまた「化政時代」と称せられる市民文化の成熟期を基盤とし、わが国の内政・外交におけるインパクトに触発されたものであったかも知れない。文化年間の地理的業績が、きわめて、洗練された内容を有するものも右の事情を享けるもので、ことに、地図ならびに、紀行付載の写生図・挿画等は、端的にこれを示しており、いわゆる「化政文化」の一翼を担うに足るものである。^④

ことに、地図にみる正確さ・明晰さ・美しい品格は、この時期の作品の特徴とも言えるもので、感覚的にも他の時期のものとは異なる。「文化の地理学」は、また当時、世界における最先端をいくすぐれた銅版世界地図をも生み出していた。いうまでもなく、「新訂万国全図」(第1図)であり、当時、最新のヨーロッパ資料を基礎に世界の広汎な地域を描くとともに日本および中国、ことに日本の北辺における未知の土地の地理像を鮮かに、正確に、表現している点において、比類



第1図 高橋景保等撰「新訂万国全図」文化七年序 京都大学文学部地理学教室蔵

のないものであった。

いわゆる「発見時代」以後、十八世紀になると、ヨーロッパ人の探検も、科学的探検航海にその性格を変えるが、この「新訂万国全図」はその頂点に立つ、クックやラペルーズの航海の成果も十分に取入れ、かつ、東アジアに関して独自の地理的知識を表現していたのである。

その表現は、地理学的にみて、確かな型式と構造、正確な内容と意味を備えたもので、世界についてのわが国人の最初の卓絶した地理的ランガーシュとなっていたのである。

かの『日本』『日本植物志』『日本動物志』などの著者で、日本の科学的研究を目的としたシーボルトの地理的知識の探究が、いわゆるシーボルト事件に結末することは、周知の如くであるが、彼のもとめた標的が、当時一般に知られる正確な地図を有しなかった日本全土と、未知の土地であった北辺の地図類であったことは、よく知られるところであり、それは、また「新訂万国全図」の国際的メリットとなった部分とも一致するものだったのである。さらに「新訂万国全図」は、一七九八年にはじめて正確な知識の得られたオーストラリアとタスマニアの分離を示す、バス海峡をも鮮明に描かれていた。前述の如く、そこには、一七八〇年に終るクックの航海や一七八八年に挫折するラペルーズの科学的探検の成果もまた含まれていた。

そして、これらの内容をなす知識の基礎には、主として依拠した一つの図が存在していたのである。

- ① 『東方学報』京都、第三八冊、一九六七年。
- ② 有坂隆道「親試実験主義の展開」『ヒストリア』第八号、一九五三年によると、このような実証的・合理的・批判的な科学への志向は、元禄・享保期における医学の分野でまず起り、屈折しながらも、以後の時代思潮となっていたという。

このような流れのなかで、地理学の分野においては、ややおくれで天明・寛政期に萌芽し、文化年間に昂揚期を迎える。筆者は「親履実測」というのは、医学における「親試実験」に対応させることのできる実証主義の地理学における展開を示す言葉であると考えられる。高橋景保は『北夷考証』（文化六年）のなかでこの言葉を用いている。

- ③ 大谷亮吉『伊能忠敬』一九一七年、三九頁。
- ④ シーボルト事件以後『蛮社遭厄小記』の記事にみられる西洋学の姿

一 従来の研究と問題点

それは、『北夷考証』によれば「諸厄里亜国地理学士アルロウスミットナル者」の一七八〇年製の新しい世界図であるという。『北夷考証』はその第四図としてこの図の一部、日本の北辺部分の訳図を収載しており、これによってその一部分を垣間見ることができ、その原拠は従来なお判然としないまま地図学史家の間で未解決の問題となっていた。

芦田伊人教授によってこの問題が最初にとりあげられたのは一九三〇年のことであった^①。その趣旨は、『北夷考証』によって一七八〇年とされるアロウスミス図は、それにもかかわらず『北夷考証』第四図において一七八七年のラペルズの探検航海の成果であるカラフトと現今の北海道の分離を示しているとし、他方、リピンコット人名辞書にアロウスミスが一七九〇年に世界図を作成している旨をあげて、高橋景保がアラビア数字9を8と誤読したことに発するとなし、

縮傾向は、地理・地図の分野でも例外でなく、ほとんど著しい進展をみることなく、ついに明治維新にまで及んでい。

⑤ 林屋辰三郎編『化政文化の研究』一九七六年は、この時期に関する包括的な研究である。序論にあたる同教授による「化政文化の歴史的位置」は広汎かつすぐれた展望を示している。

筆者は、この時期におけるわが国地理の学において、外来文化の選択的摂取と日本人の自立的な研究成果を踏まえた高橋景保等「新訂万国全図」（文化七年度）が、代表作品の筆頭に錄せらるべきものと考える。

⑥ 拙稿「シーボルト資料のカラフト地図に関する若干の検討」『奈良女子大学地理学研究報告』1（印刷準備中）

『北夷考証』の一七八〇年作成説を一七九〇年作成とすべきことを指摘された。以来、この問題は何らの進展もなく放置せられ、筆者も近年まで疑を存しながらも一応この説に従ってきた。

ところが、一九七一年一月の人文地理学会地理学史部会で室賀信夫教授はロンドンのフランシス・エドワーズ書店の目録に収められたアロウスマス一七九〇年世界海図の北西太平洋部分を呈示され、日本の北方がダンヴィル作成図と共通し、『北夷考証』第四図とは明らかに異なるため、一七九〇年アロウスマス世界図原拠説に疑を投げかけられたのである^③。その後、一九七六・七七年海野一隆教授は、この原拠図の有する可能性に関する若干の提案を行なわれた^④。

筆者は一九六七年「鎖国日本と康熙図」の一文を草して身辺の北方関係資料を整理したが、この原拠の解釈に苦しみ、この問題を避けた。たまたま同年秋当時龍谷大学在職中の高橋正氏が在外研究に赴かれる際、『北夷考証』第四図のコピーを托して調査を依頼し、同年冬これにはほぼ適合する一七九〇年刊とされるのアロウスマス世界図の題名の報告を得た。

その後、一九七三年、渡仏された藤原利一郎教授に一九九〇年刊のこの図写真の取得を依頼したところ、アロウスマス一七九〇年図とされる図の日本附近(真の二葉と一七九四年、九九年のグローブラー)図法世界図の日本附近の写真を送っていただき、所謂一七九〇年のメルカトル図法世界図に日本附近が左右両側に複出していることを知ることができた。そして、この日本の北辺は左側が室賀教授呈示のものと同通するダンヴィル型、右側がクックの航海図にみる独特な姿を呈していた。一九七七年、在外研究員として欧米に出張を命ぜられた際、Deutsche Staatsbibliothek, British Library, Bodleian Library, Bibliothèque Nationale, Bibliotheek der Rijksuniversiteit te Leiden 等々、この問題に関する資料調査を行なうことができ、筆者の従来の見解よりやや進んだと判断したので紙面を与えられた機会にこれを発表することとした^⑤。閲覧・資料提供許可等好意ある援助を得たこれらの外国の機関ならびに国立国会図書館・国立公文書館内閣文庫・函館市立図書館に衷心より謝意を表する次第である。

- ① 芦田伊人「樺太島の地図学史的考察」『史苑』第五号、一九三〇年。
 ② 室賀信夫「新訂万国全図の一資料アロウスマス図について」『人文地理』第二四卷第一号（発表要旨）、一九七二年。
 ③ 海野一隆「高橋景保のみたアロウスマス図」『蘭学資料研究会研究報告』第三〇九号、一九七六年。

「漂民津太夫らの掃国と地図の伝来」『日本洋学史研究』Ⅳ、一九七七年。
 ④ 本稿の骨子は人文地理学会地理学史部会第二二回例会において発表された。要旨は「わたくしの古地図調査(1)——『北夷考証』第四図の原拠をめぐって」『人文地理』第三〇巻第四号、一九七八年。

二 アロウスマス原図への手がかり

筆者が「新訂万国全図」の主要資料アロウスマス原図の探索に用いた資料は(一)高橋景保撰『北夷考』(函館市立図書館蔵)、(二)高橋景保撰『北夷考証』文化六年(一八〇八)述(京都大学付属図書館蔵)、(三)山田聯撰『彙輯北裔図説通覽備攷』(a)国立国会図書館蔵、(b)国立公文書館内閣文庫蔵)等で、いずれも写本である。

(一)の『北夷考』は高橋景保自筆稿本にかかり、明治三十七年七月『地学雑誌』第一六年第一八九号に掲載された東京地学協会本と同一本と目せられる。^①カラフトに関する地図資料の考証を行ったもので、(二)の『北夷考証』の下書きと解せられ、後の部分を欠いており完全ではない。作成は文化六年の前半と考えてよい。主要資料となった地図四葉の解題をふくみ、現在の稿本には地図を欠いている。基調としては『北夷考証』と同様であるが、時に『北夷考証』では整理・消去されてしまった文章を存し、この部分に見遇し難い史料価値が認められる。また『北夷考証』にない序文を存している。アロウスマス世界図については

一 譜厄里亜国製図 乙号

此図一千七百八十年我安永九年
庚子製スル所ニシテ、地球全覽ノ方図ナリ。近歳西人嚮来ノ図中冠タルモノニシテ、尤モ細審ナリ。嘗テ審ナラザル諸地ヲ悉ク審ニシ、彼人至リ、実験セン地ハ鐵路ヲ以テコレヲ証ス。

近(三)口口発下数品ノ図ト較スルニ、其詳ナル事挙クルニ違アラズ。実ニ古今独歩スルノ品ナリ。

予奉命シテ製スル所図ハ、此図ヲ主トシテ、他ノ諸図ヲ以テ校ス。此図魯西亜人モ主要ストイヘリ。彼人此図中、新ニ鐵路ヲ記セルアリ。亦証トスベシ。後第三圖ハ即チ此図ヲ抄写ス。北蝦夷ヲ一島トスルモノ特リ此図ニ止ル

と簡潔にして要を得た解題を記している〔この部分は文章構造を幾分変えてつぎの『北夷考証』にも残される〕。

(二)の『北夷考証』は文化六年(一八〇八)八月述。この書は近世日本地理学の中で最大の傑作とされるもので、当時未知土地とされたカラフトの地理像が大陸に連る半島とする説や二島より成る説等があつて混乱していたのを和漢洋にわたる四種の地図からその姿を立証し、当時最も正確な地図を作成してその一島であることを示した。『北夷』とはカラフトの謂で、幕府の直轄と時を同じくして公に名称を改めた「北蝦夷」の略であつた。

著者高橋は新たに「輿地総界図」作成の命をうけて、西刻などの諸資料を得てこれを検討して一図を作成したが、わが北辺カラフトについて、その輪郭・面積そしてまた一島なのか、二島なのかの正確な地理像を得るのに困惑してその研究を二年にわたって行ない、その考証成果を示すが本書の目的であつた。

『北夷考証』所収図はこの目的に沿う左の五種が選ばれている。すなわち

一 「校訂図」

二 「乾隆年製図」

三 「西士ピーテルホンデ書中ニ載スル所ノ図」

四 「譜厄里亜国新訂<sup>我安永九
年庚子</sup>製図」

五 「間宮生実験図」

であつた。簡単にいえば、右の内容は一が、二―五図を資料として編輯した高橋の所見を示す地図、『北夷考証』全文はそのための考証でその結論に当るものである。二は清康熙年間にイエズス会士が作成した漢字による木版地図のカラフト黒龍江河口一帯図にもとづく「乾隆年製」と箱書されたこの図を康熙時代のものとする考証も『北夷考証』の一部をなす。三は

プレホスト蘭文旅行記附載の地図の地名を片仮名日本訳に改めるもので、前出二と全く一致する。四がアロウスマス世界図の日本本土北端よりカラフト・黒龍江流域・カムチャツカ半島南部などをふくむ部分訳図〔第2図参照〕、五は前年春カラフト探検を行なった間宮林蔵・松田伝十郎等の探検結果を示した地図と、同年冬間宮が再び命を奉じて探検旅行を行った途次から送付した地図の二つを綜合して作成した地図で、最初のものはこれを比較・校訂して集成了なものでいずれも筆者のいわゆる「文化の地図」の雰囲気を与える精緻・美麗なものである。そしてこの第四図について『北夷考証』は、西刻諸図ならびに清人の地図をみるとその地理像は様々で、カラフトを「サガリン」と「カラフト」の二島とするものが多く、右の二・三などの図は一島となっているが、南方が曖昧模糊となっていて信じがたい。しかし、

近時官物御藏トナル所ノ語厄里亜国「アロウスマット」ナル者新製輿地図一葉アリ。コレ彼一千七百八十年我安永庚子製スル所地球全覽ノ方図ナリ。

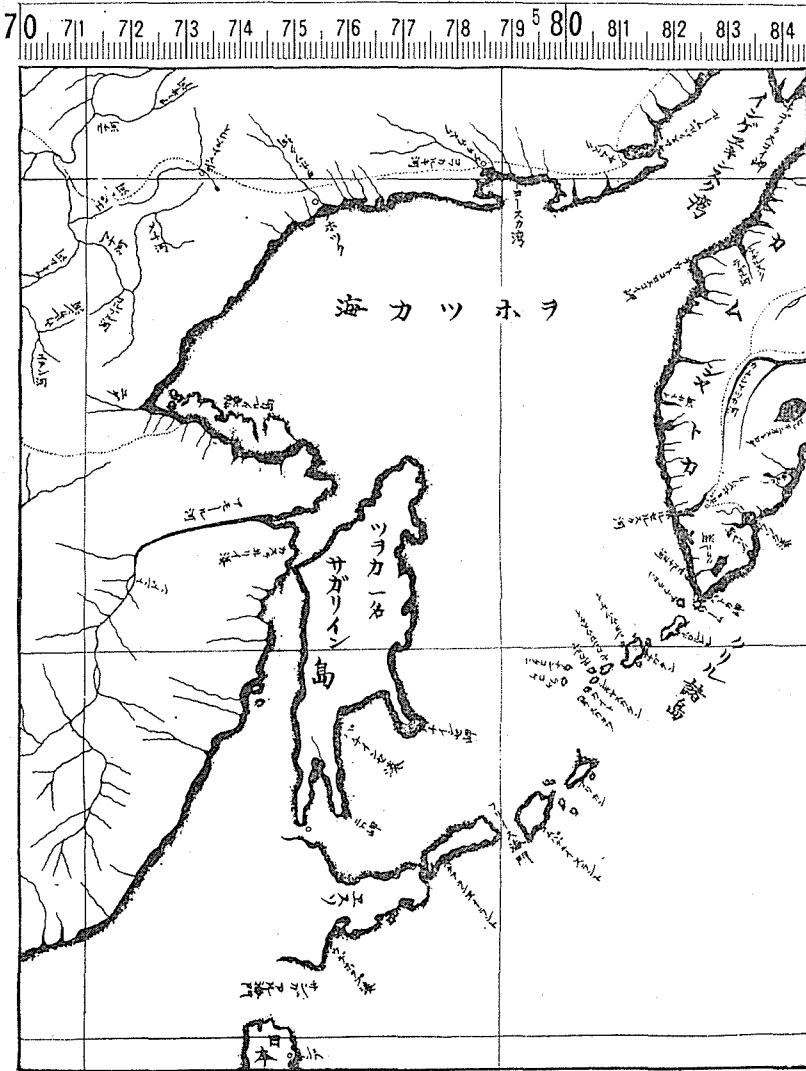
とされる地図があり、高橋が「総界全図」を新製すべき命を受けた際、とくに此図を主として他の数地図をその校閲にあつたのであつた。そしてこの地図の他と異なる著しい特徴は、

尤モ此図中ニハ我北蝦夷ト云モノト「サガリン」ヲ以テ一島トナセリ。新古ノ図、未ダ見ザル所ナリ。コレ原ト実験ニ出テ、其証アツテコレヲ為ス所ナリ。若シ旧図右ノ如キヲナセルノ実証アラバ何ゾ如斯ノ校訂新訂新製図ニシテ漫リニ改メテ一島トナサンヤ。後ニ其図ヲ出シテ示ス。第四図〔語厄里亜国新訂製図〕コレナリ。

として、この図の有する重要な意味を指摘したのであつた〔第2図参照〕。この部分、やや文章を異にして前出『北夷考』にもみられる。

この図は、北はベンジンスカヤ湾北端を欠き、オホーツク北岸の大体を示し、西は西北にレナ川上流部を、西南に黒龍江下流部をふくみ、南は本州北端において、東はカムチャツカ半島中部で限る。

経緯線は、経線が一三五度および一五〇度（グリニチ基準）の二本、緯線は、北緯四〇・五〇・六〇度の三本、経緯度の



第2図 高橋景保『北夷考証』第四図「諸厄里亜国製図」(文化六年) 京都大学付属図書館蔵

数字ならび目盛を欠く。陸地の輪郭はラベルーズ図によるものと思われるが、ラベルーズ図にないレナ川上流部・黒龍江下流部の詳細な水系を有し、カムチャツカ半島南部、オホーツク海北岸に円型の記号で示される集落がみられる。また点線で示される交通路がカムチャツカ南東岸のウツカ湊よりポリセレンツクを經由し、カムチャツカ川中流で、同川下流部へ一本の交通路を派出しながら北上するが、東端の枠で切られて一旦消えた後、オホーツク海北岸で再び現れてヤムスク・タラウスクを經由、ヲホツクの北方を通り、ユドムスク対岸からユドム河流域（レナ川上流）に入る。また黒龍江北岸には点線で露清国境が示されている。

第三の『彙輯北裔図説通覽備攷』は崎門派の儒者山田聯（慥齋）の撰。文化六年（一八〇八）の序文を有し、さらに献上のための文化八年の序文がある。露・蘭・英・仏などのほか清国の地図をふくむ一七種の北辺地図を掲げてその考証を行ない、これらを基礎に撰者自身による「蝦夷全地畧図」なる独自の地図を作成して附したものである。著者山田聯は幕府の有力者で、蘭学にも理解の深い堅田侯堀田正敦に仕え、その下野への移封の際も従った。堀田正敦はまた仙台伊達家の出で、昌平疊・天文方など幕府関係の機関ならびに大槻玄沢一派との交渉もあって資料蒐集の便宜を有していた。このため山田の資料蒐集は和・漢・洋にわたってきわめて広く、彼の蒐集資料を通じて天文方で把握していた当時のこの方面の資料をも窺い知れるように思う。^③この書の第一七図がアロウスミス原図の一部で「諸厄里亜国撰海上全図所見蝦夷四境全図」の題目を有していた。これに附された解説・考証の骨子をつぎに述べよう。

この図説明の第一は著者が「諸厄里亜国地理学士アルロウス・ミット」、刊年を一七八〇年とする「海上全図」であること。入手経路が文化元年（一八〇四）の「魯西亞使節レサノット等入貢ノ日ニ当リテ齎シ到レルトコロニシテ、我和蘭詔司本木某私カニ請得シテコレヲ進呈」した「古今未曾有ノ精図」であることを示す。

第二は本図が、経線一五度、緯線一〇度のものであること。これが「円ヲ転ジテ方ヲナスノ法ニ倣ヒ模出シタ」もので、「その巧妙精緻、誠ニ蚕糸牛毛ヲ分ツベキ物タレバ、ソノ精密又コレニ過グルモノナカルベシ」とその精緻さを賞揚する。

そして「ナオイマダ遺漏ナシトスベカラザルハ、船師ノ所見伝説モトヨリ差謬ヲ免レザレバナリ」と、それにもかかわらずなお誤の存することを指摘する。

彼の指摘する誤は、簡単に要約すればつぎの如くなる。

① 現在の北海道東部が、蘭人の旧測によっているため、過度に東方にのび、それによって、わが方から数えて千島第一島が実は第三島の位置にある点、また千島列島一般の不確かな描繪の指摘。

② カラフト東南の二岬湾は、旧測によるもので、ことに北西岸は実証を経たものではない。それは図上に示される航路によって知ることができ、また大陸からカラフトへの海路が示されているのは、とくにこの部分の地理を調査して図上に載せたものであるらしい点。

③ オホーツク海の東西幅が一五度になっており、過度に狭小で、それは西洋旧来の諸国が、韃靼東岸の位置に差誤のあることを知らなかったためとして、他にも例をあげて、この図の信従しがたい点の存することを述べる。

④ カラフトに関して南北八度半、東西五度余の大島を示しているが、カラフト東岸、阿党吉河以北の地理、地名などが無視されており、これには疑問の余地がある。また前述の韃靼海峡をこえる点線については、附近住民の渡島ルートで、清朝の命によってその形象を審測したものによって填補したもののようである。^④

① についてはまずは妥当な疑問とすることができ、②の後半、③④の後半については必ずしも妥当な疑問とはいえず、正否相存するものというべきであろう。

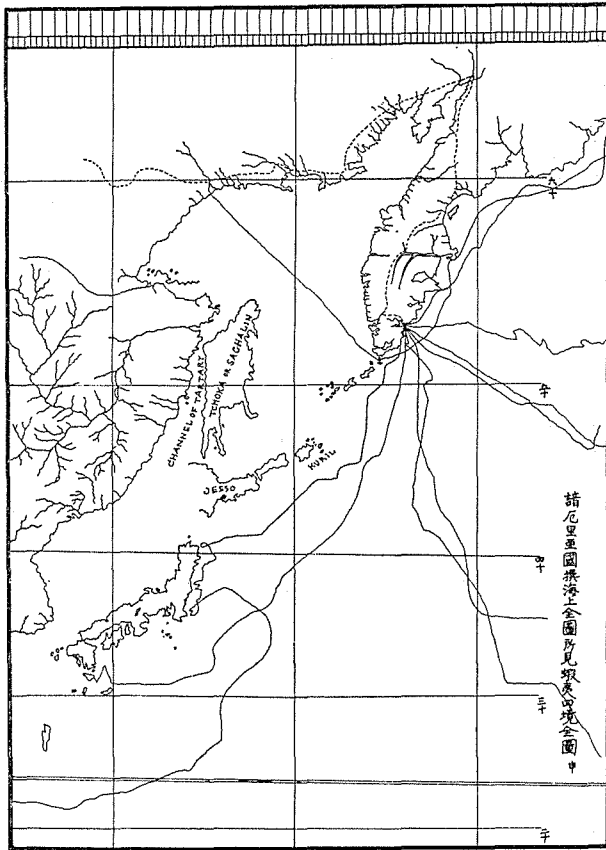
そして、右の疑問数カ条について山田聯はいまだにその正しい知識を得るに至らず、問題ののこるところとなし、

「大凡西図ノ航シテ我ニ齋シ致セルモノ中ニ就テ、ソノ製作用工トイマダコノ図ノ精密ニスグルモノヲミザレバ、誠ニ希世ノ珍図ト言ベシ。故人或ハコレヲ最上ノ物トシテ、ソノ許多云々議スベキコトヲ曉ラズ。両島合称ノ所由ヲ弁知セザルモノカ」

とし、これを資料として他の諸図を加えて検討すれば、当世になお疑問の点も明らかとなるであろうとして、山田聯はこ

の図の最も重要な点と考えると、

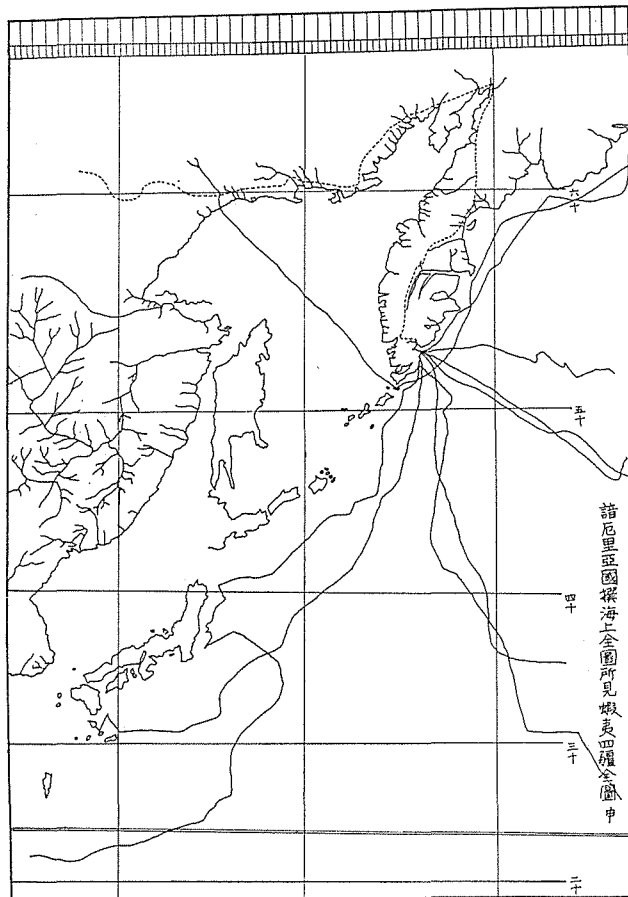
按ニ、コノ図ハ「カラフト島」「サガリン島」トヲ合セテ一箇ノ島地トシテ画出スルモノニシテ、外更ニイマダカクノ如ク摹写スルモノヲミザレバ、実ニ攷証ニ備フベキモノニシテ、又ソノ疑フベキモノヲ著明スル如此。然レドモコレ等ノ所由、彼ニアツテ、即チ既ニ審明ヲ得ルトコロナルベシ。姑ク所見ヲ述ベテ博達ノ士ノ是正ヲ俟ツノミ。



第3図 山田聯撰『彙輯北裔圖說集覽備攷』（文化八年序）
所収「諸厄里亞國撰海上全圖及見蝦夷四疆全圖」
国立国会図書館蔵 模写

ここに録せられる「諸厄里亞國撰海上全圖所見蝦夷四疆全圖」は④国立国会図書館蔵本⑤国立公文書館内閣文庫蔵本の同一人物の手跡になる二写本があり、型式・図どりなど基本的には共通し、④図に海峽名・島嶼名など三個の英語による記載がみられる点を異にする。

所収の範囲は『北夷考証』第④図と比較すると、北が緯度約二度、東が経度約一三度、南が緯度約二〇度、西が経度六度だけ広くなり、北限が北緯六五度、



第4図 山田聯撰『彙輯北裔図説集覽備攷』（文化八年序）
所収「諸厄里亞國撰海上全圖所見蝦夷四疆全圖」
国立公文書館内閣文庫蔵 横写

べてが描かれ、西は朝鮮半島が東西に二分され、その東半部のみがあらわれる。

『北夷考証』図との共通範囲をみると、陸地の輪郭は全く共通するが、内容の記載において、レナ川上流水系のすべてを欠き、また片仮名書きの集落名・島嶼名・半島名河川名などのすべてを欠く。ただ④図にのみ、韃靼海峡に CHANNEL

OF TARTARY, カラフトに THOKA OR SACHALIN, 千島列島に KURIL などの三つの地理的名称を記す。また

東限が東経一七六度、南限が北緯二二度、西限が東経一二六度を以て限られる。

経線は東経一三五、一五〇、一六五度の三本で一五度間隔、緯線は北緯二〇、三〇、四〇、五〇、六〇度の五本で一〇度間隔、経度の目盛のみ存して数字を欠き、緯度は数字のみ存して目盛を欠く。

陸地の輪郭は、北はペンジナ湾北岸をふくみ、東はカムチャッカ半島が全き姿を示し、南は日本列島のす

『北夷考証』図にみられない、オホーツクより発し、カムチャッカ半島南端を回航して北上する航跡、アワチャ湾より出入するカムチャッカ東岸、日本東方海上のクック亡きあとのクック艦隊の航跡、同港に入り、同港より出て九州南方の一島に終るクルーゼンシュテルンの航跡が、一切の注釈なしで描かれている。

① 函館市立図書館現蔵。川上聴剣氏旧蔵。一九七六年春同僚の武久義彦教授とともに同館に訪書し、厚意ある援助を得た。

② 今井深「ビートル・デ・ホンドの万国図記」『蘭学資料研究会研究報告』第一六〇号、一九六四年。

③ 拙稿『東方学報』京都、第三八冊、一九六七年、七三頁。

④ ④の前半は妥当な批判と考えるが、後半にみえる点線の解釈は、たしかにこの地方の住民の渡島ルートがこの付近にあるとしても、地図学的には別の解釈も成立つ〔次章註⑥参照〕。

三 わが国の資料におけるアロウスマス原図の地図的要素

ここで右の資料にみえる地図ならびに説明からアロウスマス原図の具備しているはずの要素を整理してみよう。すくなくともこれらの資料に断片的にでも窺われる地図的要素を筆者の求めるアロウスマス図は備えていなければならないからである。以下『北夷考証』図は単に「考証図」と、『北裔図説集覽備攷』図は「図説図」と略して呼ぶこととする。

(一) 題名・内容・著者

「図説図」に、「諸厄里亜国撰海上全図」と称し、また『北夷考証』に「地球全覽ノ方図」、「輿地図」などと記されるように、英国製・世界全体のカバー、「方図」すなわちメルカトル図法、「海上全図」といわれるように海図の名称をもつ可能性が考えられる。また『北夷考証』に「古今舶来諸地中コレヨリ精ナルハナク」とされ、「実ニ古今独歩ノ精図」といわれる詳細な図で、「從來不分明又未審ノ地方ノ如キモ明瞭シ」といわれるように新しい発見の内容をもふくんでいる。「図説図」説明も「古今未曾有ノ精図」という。著者については『北夷考証』は「諸厄里亜国アロウスマスミット」といふ、「図説図」説明には「諸厄里亜国地理学士アルロウス・ミット」という。

(二) 刊年

『北夷考証』は一七八〇年とする。また「新製輿地図」といい「古今舶来諸地図中コレヨリ……新製ナルハナシ」という。「図説図」説明には「文化元年魯西亜国ノ使節レサノット等入貢ノ日ニアタリ齎シ到レルトコロニシテ我和蘭訳司本木某私ニ請得テコレヲ進呈スル所ノ物ナリ」といい、レザノフの乗艦ナデジユダ号はクルーゼンシュテルン艦長の指揮のもとに一八〇三年八月七日クロンシュタット軍港を出港しているので下限が判然とする。^②

(三) 経緯線・経緯度

「考証図」は黒龍江下流部・オホーツク海中央を通過する経線二本、日本本土北端、「サガリン島」中部・オホーツク海北岸を通過する緯線三本を有し、経緯度とも目盛・度数を欠く。「図説図」は「考証図」に比べて所収範囲がやや広く、「考証図」の経線に加うるにカムチャツカ半島東方にもう一つの経線を有する。緯線は「考証図」のそれに更に南方に三つが加わり、別に回帰線も示される。両図に共通する経緯線は同一地点を通過する。「図説図」はまた、経度の目盛(一五度毎)を存して経度数を記さず、緯度の目盛は欠くが緯線には、二〇・三〇・四〇・五〇・六〇の度数が一〇度毎に示される。「図説図」説明には経度一五度毎、緯度一〇度毎の引線を有する旨記される。また経度の目盛は一度、〇・五度を読みとれるように付されている。

(四) 陸地の輪郭・水系

「考証図」「図説図」^④^⑤とも範囲を共通とする部分は一一致。カムチャツカ半島・オホーツク海沿岸・千島列島・黒龍江附近及び以南の海岸線・朝鮮半島・カラフト・現今の北海道・日本列島などすべてラペルーズ図にみえる陸地の輪郭と共通の特徴を有する。

水系は三図とも殆んど共通し、比較的詳細といえる。レナ川上流水系・黒龍江下流の水系を克明に描いている。ラペルーズ図では黒龍江水系において河口のみを描くだけで他は全く記していない点、輪郭を同じくするにもかかわらず、これら図が直接にラペルーズ図に出自するとはいえない。^③

(五) 露清国境線

「考証図」「図説図」④⑤ともに黒龍江下流の北方に露清の国境線をほぼ東西に描く。

(六) 陸上幹線交通路

「考証図」「図説図」④⑤ともに記される。「考証図」には、関連地名がみられ、カムチャッカ半島南東のウツカ湊より発し、ボルセレツク經由、カムチャッカ川上流部に至り、ここでカムチャッカ川下流部へ道路を派出し、半島中央部を北上して、ベンジナ湾西岸に達し、オホーツク海北岸に沿ってヤムスク・タラウスクを通過し、西に延びてユドムスク附近を経てユドム川流域に入る幹線路が点線で示される。ただ「図説図」④⑤とも一切の関連地名を欠き、点線の表示のみ示される。

(七) 航跡

『北夷考証』に「其航海実験セシ者ハ其行海ノ針路ヲ引線シ、其年月ヲ傍記シ、各土地形ノ出没方位等ヲ改正スルノ類、其詳ナル事拳テ計フベカラズ」とあり、また注記に「魯西亜人モ亦是ヲ珍重シ、其図中ニ就テ国船始テ行海セン針路ヲモ相補テ引線セリ」と記す。

「考証図」にはこれらの航跡は全く示されていないが、「図説図」④⑤には、アワチャ湾より発し、カムチャッカ東方海上、日本東方近海に延びる航跡があり、これはクツク亡き後のクツク艦隊の航跡である。またアワチャ湾から九州南部の一島に至る航跡がある。またアワチャ湾から東方へ向うもの一、東南に向うもの二、北東に向うものがある。オホーツクよりカムチャッカ南端を回航して北上する航跡も記されている。^⑤

(八) 韃靼海峡に記される点線

「図説図」説明に示されるように、黒龍江口南よりカラフトへ海を越えて交通路らしき点線が認められる。^⑥ 『北裔図説集覽備攷』の著者山田聯はこの方面の地理的問題に関心のある作者の地図であろうと考えている。

(4) 地理的名称

「考証図」にふくまれる六四個の地理的名称は少くともすべてが、完全に含まれねばならない。

また「図説図」④にふくまれる

CHANNEL OF TARTARY

THOKA OR SACHALIN

KURIL

の三つの英語的表現が示されねばならない。

以上三資料から、求めるアロウスマスの備うべき条件を右の如く整理した。つぎにこれらの条件を備えるアロウスマス地図を探索しなければならない。

- ① 文化六年五月九日付高橋景保より間重富宛書簡追伸と目される部分の記述によって本木庄左衛門正榮であることがわかる。資料は上原久・小野文雄「高橋景保の書簡について」『埼玉大学紀要』(人文科学篇)、第一七卷、一九六九年所収。
- ② 羽仁五郎訳注『クルーゼンシュテルン日本紀行』上巻、一九三一年、八五頁。
- ③ 室賀信夫前掲要旨。
- ④ ベルグ・小場有米訳「カムチャツカ発見とベーリングの探検」一九四二年がこの幹線道路の存在を記している。
- ⑤ 航路はカムチャツカ東方洋上において、原図よりかなりの程度選択されている。その選択には往路のみ記し、復路を記さぬものもある。
- ⑥ この点線は、「太平洋海図」(九枚組)では砂状の記号の南縁を示す点線で、この海峡の交通阻止を示すという解釈も成立つ。ラペルス図にはこの記号は見当らない。

四 アロウスマス作成の関係地図

アロウスマスの名によって出版された海図類は大英図書館印刷地図目録、ドイツ国立図書館地図目録、アメリカ国会図書館地図・地図帳目録およびその他の主要図書館の目録を一瞥しただけで管見に入るもの一〇〇種あまりを数える。これ

らのなかで、本稿の目的にかなうもの一〇数点をとりあげてみた。

いまこれらを類別すると、

- I、世界海図
- II、世界地図（両半球図）
- III、太平洋海図（九枚組）
- IV、太平洋海図（一枚図）
- V、マンス海峡海図

などがあげられ、それぞれ一七九〇年から一八〇〇年代前半のものがある。
以下その題名を記すと、

I 世界海図（メルカトル図法）〔以下C図と略す〕

[C₁] A CHART OF THE WORLD / UPON / MERCATORS PROJECTION, / SHEWING / ALL THE NEW DISCOVERIES to the present Time: / WITH / The Tracks of the most distinguished Navigators, since the Year 1700 / Carefully collected from the best CHART, MAPS, VOYAGES &c. Extant, / AND / Regulated from the accurate ASTRONOMICAL OBSERVATIONS made in three Voyages / Performed Under the Command of CAP^T. JAMES COOK in the Years / 1768, 69, 70, 71.-72, 73, 74, 75.-76, 77, 78, 79, & 80. / Compiled and Published by A. Arrowsmith, Geographer. [BN]

メルカトル図法による世界海図の試作図と目せられ、東経三〇度、同一三〇度間の子午線度目盛を斜に切って、異様な型式でタイトルが入る。タイトルはこのシリーズ、本図以後のものとは比較して小異を存する。

[C₂] CHART OF THE WORLD / ON MERCATOR'S PROJECTION, / Exhibing all the NEW DISCOVERIES

to the present Time: / with the Tracks of the most distinguished Navigators since the year 1700, carefully collected / from the CHARTS, MAPS, VOYAGES, &c. Extant. / And regulated from accurate ASTRONOMICAL OBSERVATIONS, made in three Voyages. / Performed under THE COMMAND of CAPTⁿ. JAMES COOK, in the Years / 1768, 69, 70, 71.——72, 73, 74, 75.——76, 77, 78, 79. & 80. / Compiled and Published by
A. Arrowsmith, Geographer. [Francis Edwards]

右のC₁図を試作図とするメルカトル図法による世界海図のシリーズの完成図と目せられる。日本の北辺はダンヴィル図型、ファン・ディーメンズランド(タスマニア)はなおニューオランダ(オーストラリア)から分離してゐない。

[C₂] do. [Bo]

C₂図は一七九四年発見のウェーク島などを記しており、このC₂図シリーズはいずれも「一七九〇年の法令に従って刊行」と記されるが、この図の刊行は一七九四年以後となる。日本の北辺はダンヴィル図型。タスマニアは尚オーストラリアから分離してゐない。

[C₄] do. [BN]

C₄図の日本北辺がラプリーズ図型に変化し、タスマニアはタスマン海峡によってオーストラリアと分離する。^①

II 世界地図(ニコロニヤー図法) [以下図を略す]

[M.] MAP of the WORLD on a / GLOBULAR PROJECTION / EXHIBITING / Particularly, the Nautical Researches / of / CAPⁿ. JAMES COOK, F. R. S. / with all the / RECENT DISCOVERIES / to the Present Time, / Carefully Drawn by / A. ARROWSMITH.

[Dedication]

This / MAP / Is Respectfully Dedicated / TO Alexander Dalrymple Esq. F. R. S. / IN TESTIMONY / of his New

and Valuable Geographical Communications / To His most Obedient / and very Humble Servant / A. Arrowsmith~ / Charles Street, Soho / January 1st 1794 [BL]

日本北辺はマンヴィル図型。タスマニアは分離してゐる。

[M₂] do. Addition to 1799. [L]

日本北辺はランルーズ図型に変化するが、タスマニアはまだ分離してゐる。

[M₃] do. Addition to 1799 [BN].

日本の北辺がランルーズ図型に変化し、タスマニアが分離する。

Ⅲ 太平洋海図(九枚組、メソカート図法) [式下ロ図を略す]

[P₁] CHART OF THE / PACIFIC OCEAN / Drawn from a great number of / PRINTED AND Ms. JOURNALS / By A. ARROWSMITH, Geographer, / SOHO SQUARE, LONDON. / 1978

[Dedication]

To / Joseph de Mendoza Rios Esq^r. / F. R. S. &c. &c. / This Chart of the / PACIFIC OCEAN / Is Dedicated, / In testimony of Respect and Esteem, / By His much Obliged Humble Serv. / A: Arrowsmith. [BL]

日本北辺はランルーズ図型。タスマニアは分離してゐる。

[P₂] do. Addition to 1808 [BL]

カラフトのみランルーズ図型。現在の北海道・九州の輪郭が変化する。タスマニアが分離する。以下のシリーズでの顕著な変化はP₄図において、日本北辺がクルーゼンシュテルン型に変化する。

[P₂] do. Addition to 1810 [BL]

[P₄] do. Addition to 1810, 14, 17, 18...to 1822. [BL]

- [P₅] do. Addition to 1810, 14, 17, 18...to 1822, 26, 32. [BL]
- M 要約太平洋海図 (一枚もの。メルカトル図法) [以下R図と略す]
- [R₁] Reduced / CHART / — of the — / PACIFIC OCEAN / from the One Published in / NINE SHEETS / — by — / A : ARROWSMITH.
- x x x
- LONDON. *Published October 1st. 1798 by A. Arrowsmith. No. 5 Charles street, Soho Square.* [BL]
- 日本北辺はラペルース型。タスマニアは分離してゐる。
- [R₂] do. [D]
- 日本北辺はラペルース型。タスマニアが分離する。R₁図下欄外の刊年の記載と刊年を同じくし、マロウスマスの住所が No. 24 Rathbone Place. に変化してゐる。
- [R₃] Reduced / CHART / — of the — / PACIFIC OCEAN / from the one published in / NINE SHEETS / — by — / A : ARROWSMITH. / *Hydrographer to H. R. H. Prince of Wales. / Addition to 1809.* [BL]
- 日本北辺はカラントのみラペルース型。現在の北海道・九州の輪郭が変化する。タイトルの著者名に、*Hydrographer to H. R. H. Prince of Wales* が加わり、下欄外マロウスマスの住所が No. 10 Soho Square に変へる。
- V ヲンス海峡海図 [以下B図と略す]
- [B] A CHART / of / BASS'S STRAIT / BETWEEN / NEW SOUTHWALES AND VAN DIEMEN'S LAND. / *Explored by / MATTW. FLINDERS / 2nd. Lieut. of his Majesty's Ship Reliance, by order of His Excellency / GOVERNOR HUNTER, 1798. 9.*
- x x x

London. *Published June 10th. 1800 by A. Arrowsmith. No. 24 Rathbone Place.*

[D]

タスマニアの分離と同島の周囲を示す最初の公刊印刷海図と目される。重要参考図として著録しておく。

なお、右の題名末尾の「」は左の所蔵機関を左の略称で示したものである。

[BL] British Library, London.

[BN] Bibliothèque Nationale, Paris.

[Bo] Bodleian Library, Oxford.

[D] Deutsche Staatsbibliothek, Berlin.

[L] Bibliotheek der Rijksuniversiteit te Leiden.

右の諸図を検討対象とした理由は、Ⅰ世界海図の類に関しては『北夷考証』にアロウスマスの原図が「地球全覽ノ方図」とされ、『北裔図説集備攷』が「譜厄里亜製海上全図」と記しているためである。

Ⅱの世界地図(両半球)をとりあげたのはⅠに関連して対象範囲を世界全体としていること。またこの類の地図がⅠに比べて刊行年が判然としているため、刊年の標準となしうる理由による。

Ⅲ・Ⅳの太平洋海図をとりあげたのは『北裔図説集備攷』に、アロウスマスの原図が文化元年(一八〇四)レザノフ来朝の際わが国に入ったことを記しており、これらの海図がレザノフの乗艦ナデジダ号艦長クルーゼンシュテルンの航海記に言及されているためである。^②

Vのバス海峡海図はオーストリア大陸とタスマニア島の分離か否かが地図の年代決定に大きな役割を果たすので、バスによる一七九八年の海峡の発見を示す最初の刊行図としてこの地図をあげた。

右の諸図のなから、前章にあげた諸条件を備える一図を探し、これらを彼此参照しながら、これらの刊年など疑問の要素を定めたく思うからに外ならない。高橋景保のいう一七八〇年刊のものはついに見当らなかった。その理由について

は以下次第に明らかとなるであろう。

- ① 本図地図部分の大きさは204.0cm×123.0cm
② レザノフ一行は、一八〇四年一〇月八日長崎に入港。一八〇五年四月

月一七日に出港した。前掲羽仁五郎訳『クルーゼンシュテルン日本紀
行』一九三一年による。

五 アロウスマス作成地図の検討

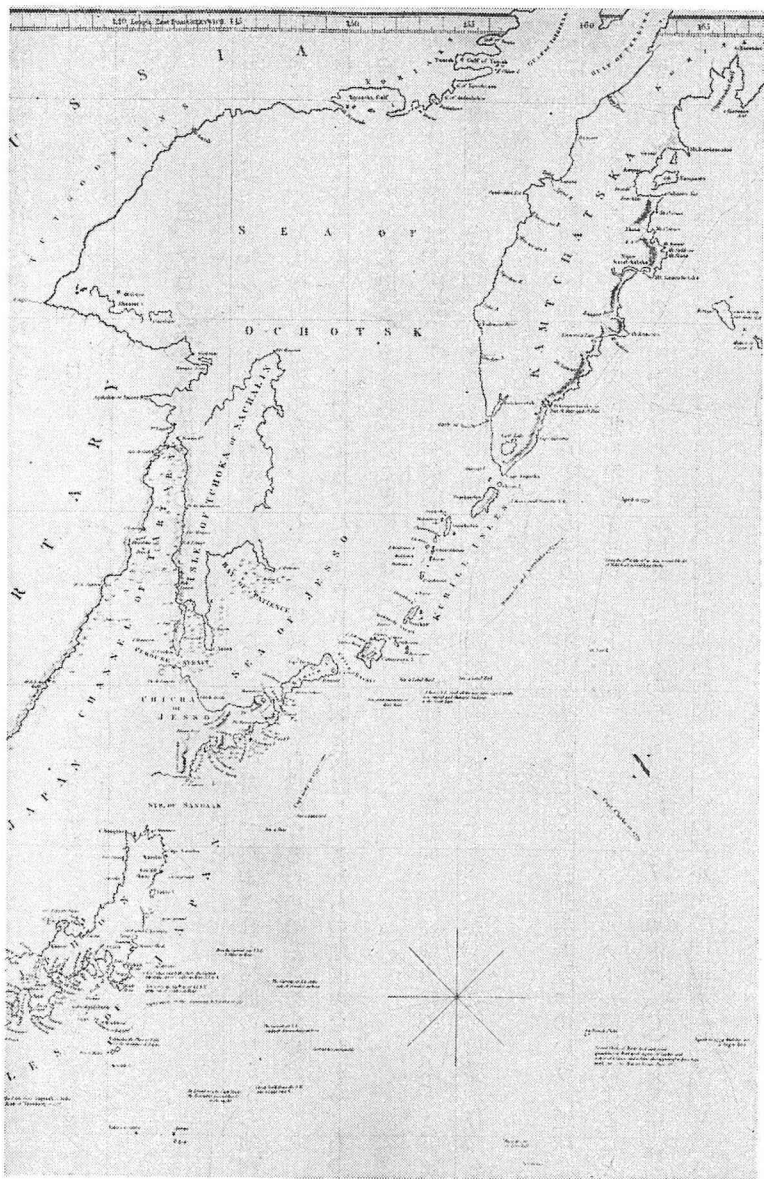
第三章において、筆者は「考証図」「図説図」ならびにこれらの説明書など限定された範囲のなかから地図的要素を整理してアロウスマス原図の有する性格を洗い出し、この地図の骨格を再構成するための基準を求めた。

本章ではこの基準にもとづいて、前章であげたアロウスマス諸図を検討し、これらの地図のなかから、右の基準のすべてに適合する地図を探し出す作業を試みることにしよう。

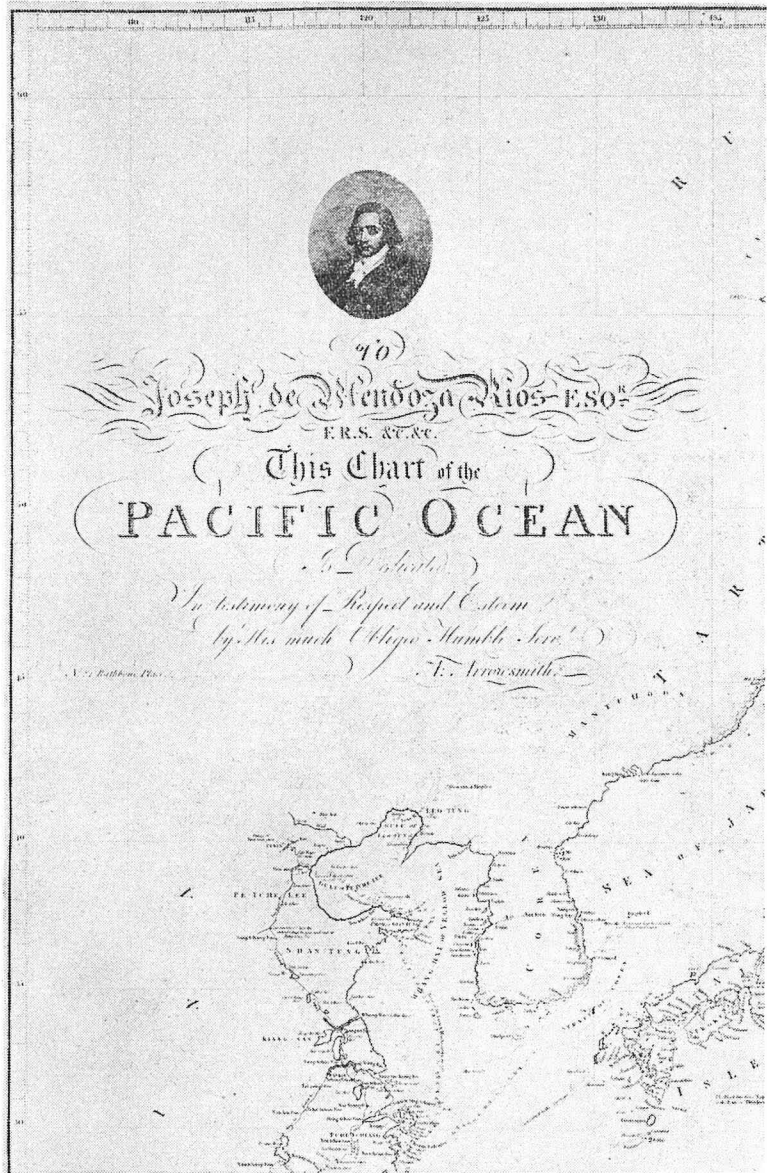
さきにあげた基準は、(一)題名・構造・一般的内容、(二)刊年、(三)経緯線・経緯度、(四)陸地の輪郭・水系、(五)露清国境線、(六)陸上幹線交通路、(七)航跡、(八)韃靼海峡に記される点線、(九)地理的名称などであったが、ここでは整理作業を容易にするため、まず型式的要素から検討に着手してみたい。

最初に投影法・経緯線・経緯度などから着手しよう。投影法を基準にとると、『北夷考証』のいう「地球全覽ノ方図」、「図説図」及び同図説明にいう海図機能を推測させる「海上全図」という点より、メルカトル図法によることは間違いな
いと思われる。そこで前章の地図からメルカトル図法によるものを取りあげるとⅠ世界海図(C)、Ⅲ太平洋海図(九枚組)(P)、Ⅳ太平洋海図(R)(二枚)がこれに該当し、他のⅡ世界地図(M)、のグループは消去される。Ⅵバス海峡図は参
考図で別扱いとなる。

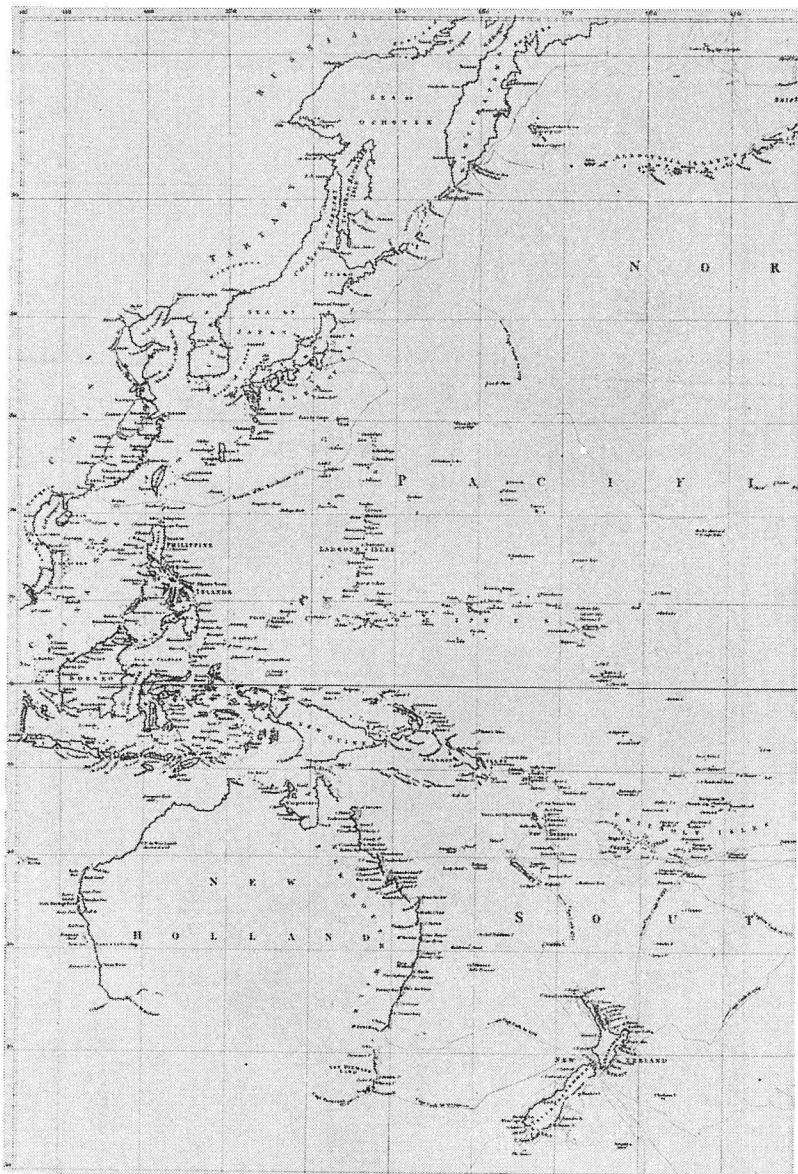
経緯線・経緯度について、求めるアロウスマス原図は、「考証図」「図説図」同図説明の如く、経度一五度毎、緯度一〇
度毎に引線されていなければならない。さらに「図説図」④⑤にみるように経線の目盛は一度毎にわけられ、さらに、



PRINTED AND Ms. JOURNALS by A. Arrowsmith, 1798
国立図書館蔵



第5図 CHART OF THE PACIFIC OCEAN Drawn from a great number of アロウスマス「太平洋海図（9枚組）」（1798年）の北西部分1葉 英国



第6図 Reduced CHART of the PACIFIC OCEAN from the one published in NINE SHEETS by A. Arrowsmith, 1798
アロウスマス「要約太平洋海図」(1798年) 西側部分 英国国立図書館蔵

加うるにⅠ度の目盛が附されていなければならぬことになる。いまこの条件をⅠ、Ⅲ、Ⅳの類についてみると、Ⅰは経度一五度、緯度一〇度の引線で、経度の目盛もまた完全に一致し、経線・緯線ならびにスケールにおいても三図に合致する。ただⅠ類の図は経度目盛が北緯八二度に附せられており、現存の山田聊の「図説図」が目盛を本来の位置から南へ一七度移動させたと考えれば無理なく解釈できる。

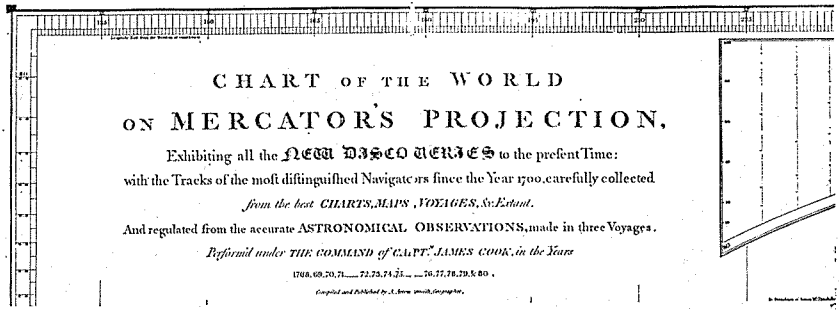
つぎにⅢをみると、経緯線とも五度毎の引線で、目盛は経緯度ともに一度が一〇等分されており、二分の一度を見易くするように目盛の線を一〇分の一度の線より長くしてある。目盛の位置、北緯六二度、東経一五五度と一六五度の間で二つの湾がこの目盛を切っている。またⅣ類は経緯度の引線はともに一〇度毎、目盛は一度毎で二分の一度の目盛を欠き、北端の目盛の位置は北緯六二度にあり、目盛を存したままで、湾入が割込んでいる。経緯度の目盛とも「考証図」「図説図」④⑤三図に一致せず、またスケールも合致しない。

右の型式による分類の結果、ⅢⅣ類の太平洋海図、九枚組・一枚の両グループが消去されることになって、Ⅰ世界海図の類のみが適合する条件をもつことになる。

つまり、この型式の検討で、Ⅰ世界海図すなわち、Cグループのみを検討すればよく、前にあげた基準により、Ⅰの類のC₁、C₂、C₃、C₄を検討すればよいわけである。そこで陸地の輪郭に重点を置いてオホーツク海周辺・カラフト等に特徴的なラペルーズ型という指標がこの「考証図」「図説図」④⑤の共通の条件となる。ところでC₁図のカラフト・現今の北海道はこのラペルーズ型ではなくて、これより以前フランスにおける權威ある地図とされた、宮廷地図師ダンヴィルの描いた特徴をもつ。C₂・C₃ともにこのダンヴィル型であってラペルーズ型のカラフトをみない。

そこで、残るC₄図をみると、この図には明瞭なラペルーズ型の輪郭となっており、この基準に適合することになる。

水系についてみると「考証図」「図説図」④⑤の三資料は、ほぼ完全に近い形でC₄図と一致し、「考証図」の河川名もすべてC₄図に認めることができる。



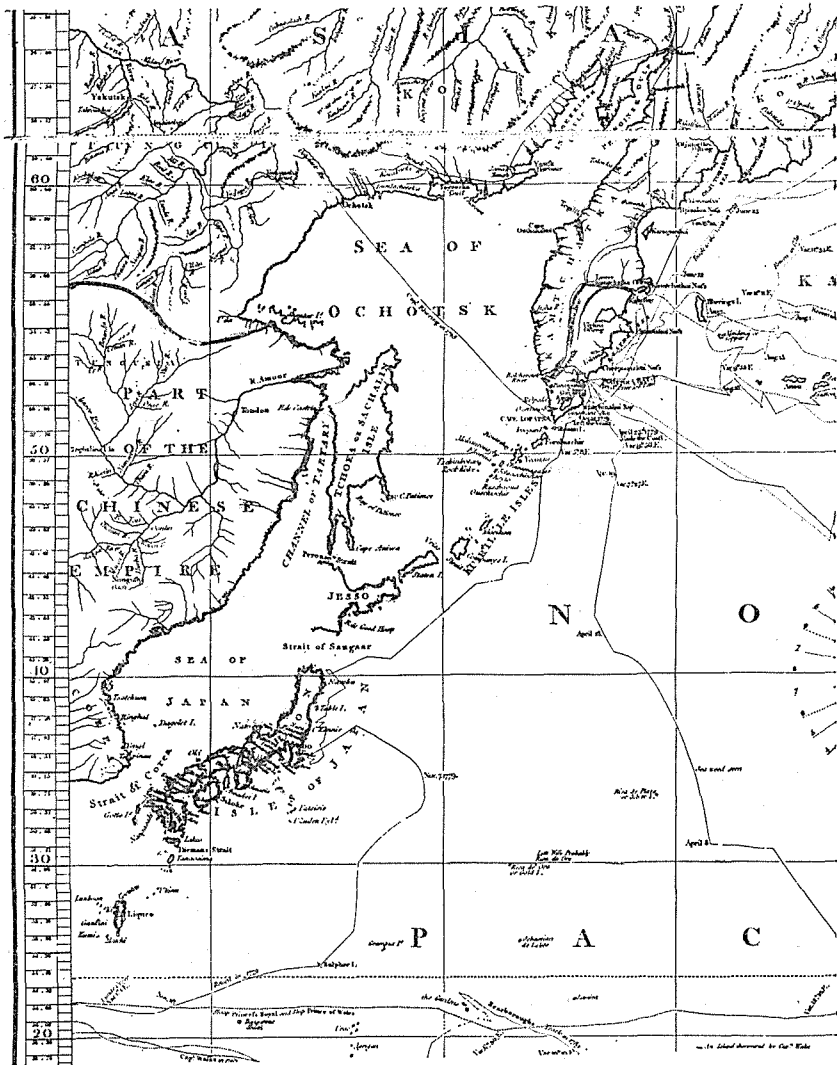
第7図(a) アロウスミス「メルカトル図法による世界海図」(C₄図)の題名 (ca. 1799)
フランス国立図書館蔵

そこで、このC₄図を残る基準で検討を試みる必要がある、第三章で立てた(Ⅱ)露清境界線を見るとC₄図には黒龍江下流部の北岸に東西にのびる国境をはっきり記している。また(Ⅵ)陸上幹線交通路もC₄図にはカムチャッカからユドム川流域に入る交通路がはっきりと点線で示されている。これも三資料とも共通して合致している。

(七)航跡はC₄図において、アワチャ湾に出入するクツクの航路、オホーツクよりカムチャッカ南端を回航して北上する航跡を有し、これは一八二八年のベーリング第一次の探検の際の航跡と注されている。またベーリング第二次探検の際のベーリング・チリコフの航跡も存在する。C₄図になく、「図説図」②③に存在するクツク・ベーリング以外の航跡はクルーゼンシュテルン麾下のナデジユダ号の航跡で、アロウスミス原図はこのロシア艦より出たものであった。『北夷考証』には、ロシア人もまたこの図を尊重しており、自らの鐵路をあらたに記入していると記しており、この地図上にさらにこれらの航跡のみられることを伝えており、そのまま筆写かの形かのいずれかによって日本側が受取っているのである。①したがって、ナデジユダ号の航跡はC₄図が不適合の条件となる要素までではなくて、むしろ具体的事情からいえば逆に適合の要素をなすのである。「図説図」の航跡はクルーゼンシュテルンのそれを除いてすべてC₄図に存在する。

さらに(Ⅷ)韃靼海峡に記される点線も、C₄図には黒龍江口南方よりカラフトに海峡をこえて記されているのである。

そして(Ⅸ)地理的名称も「考証図」にみえる六六の片仮名の名称はすべてC₄図からと



第7図(b) CHART OF THE WORLD ON MERCATOR'S PROJECTION
 アロウスキス「メルカトル図法による世界海図」(C₄図)の日本周辺部分 (ca. 1799)
 フランス国立図書館蔵

られており「第一表」、また「図説図」にみえる三個のローマ字地名もすべてC₄図に見出され、「考証図」に三個の地名しか記されぬ黒龍江流域部分を除けばC₄図からきわめて高い割合で「考証図」が地名をとっていることになる。
なお、C₄図の名称はすでにあげた如く

“CHART OF THE WORLD ON MERCATOR PROJECTION”

となっており、『北夷考証』のいう「地球全覽ノ方図」、『北裔図説集覽備攷』のいう「譜厄里亜国撰海上全図」などの名称にふさわしい題名を有しているのである。そして「考証図」「図説図」ともに陸地の輪郭・スケールが完全に一致して

『北夷考証』第4図	Arrowsmith C ₄ 図
チゴノラスコイ岬	Cape Tigonooskoi
ヲホッカ海	SEA OF OCHOTSK
カムシャトカ	KAMTCHTKA
テギルスク	Tegilsk
テギル河	R. Tegil
ヲウトコロスコイ岬	Cape Outkaloskoi
イトサ河	Iicha R.
ホルセルスク河	Bolcheretsk River
ヲセルナヨ河	Ozernaio R
ロハトカ岬	CAPE LOPATKA
[グ]ハレ岬***	Cape Gavarez
ウツカ湊	AWATCHKA BAY (or port st. peter & st. paul)
ホルカノ	Volcano
ヒルキニオストログ	Virhni / Ostrog
クリル湖	Kuril L
ポリセレット	Bolcheretsk
カムシャツカ河	Kamtchatha River
クリル諸島	KURILLE ISLE
ソーム	Shoom I.
アラヲカン	Araogan I.
ホルルシル	Forolushir
子ガタン	Necatan
ショウツケイ	Sioutschey
モカンロウスケイ	Mokanrouschy
エカルマ	Ekarma
チンコタン	Tschinkotan
ラウコケ	Rock hoke
シキヤスカタン	Schiaschkatan
カイト	Kaito
ラスカヲワ	Raschaoua
マリカン	Mrihan
コムバグニスラント	Companys I.
フリース海門	Vries Strait
スタアテンエイラント	Staten I.

*** 京都大学付属図書館本は「ゾハレ岬」

重なり合うのである。

① 海野教授のいわれるように本木庄左衛門の得た地図が、もし模写本ならば、経度目盛に数字が付されていないか、可能性もなきはない。
山田聯は「図説図」④⑤において、緯度数のみを記して経度数を記し

ていないからである。これがさらに部分写図であったとすれば経度の決定はさらに困難となる。C₄図は本初子午線に当る経度目盛を上辺で三六〇度とし、下辺で〇度とする。

六 アロウスマス原図の刊年

ここまで及べば第三章で立てた条件にほぼ完全に適合する図としてC₄図が浮び上ってくる。もしそうならば、この地図

第1表 『北夷考証』第4図と Arrowsmith C₄ 図の地名対照表

『北夷考証』第4図	Arrowsmith C ₄ 図
日本	Nippon
ナンブ	Nambu
サンガル海門	Strait of Sangaar
グウデホヲブ湊	B. de Goed Hoop
エスソ	JESSO
アニワ岬	Cape Aniwa
パチインセ湊	Bay of Patience
パチインセ岬	C. Patience
ツラカー名サガリイン島	TCHOKA or SACHALIN ISLE
カステキリィ湊	B. de Castrie
アモール河	R. Amoor
トンドン	Tondon
サンタル島	Shantar I ^s .
ユダ	Uda
ユアン河	Ujan R.
ウルカン河	Ulkan R.
コルブル河	Korpul R
マ[ヤ]河*	maja R.
アイム河	Aim R.
メチ河	R. Meti
ユドマ河	Yudoma R.
ユナ河	Juna R.
アノサ河	Anoza R.
ユドムスコイ	Yudomskoi hrest
ヲホツク河	Ochotsk Riv.
ヲホツク	Ochotsk
コ[ワ]カルキ河**	Kowakarki R.
タラウスク	Taousk
トヨースカ湾	Toyooska Gulf
ヤムスク	Yamsk
ヤムスクハルプール	Yamsk Harbour
インゲエキンスク湾	INGEEKINSK / GULF

* 京都大学付属図書館本は「マナ河」

** 京都大学付属図書館本は「コワカルキ河」

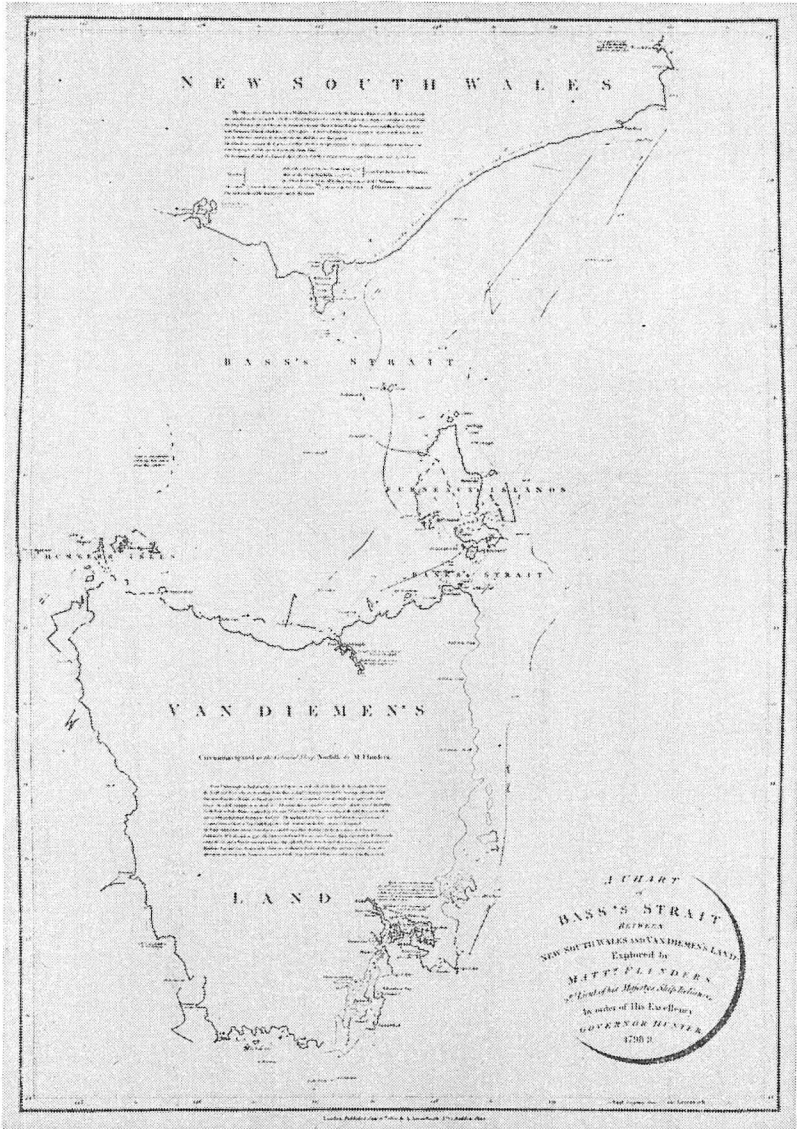
は『北夷考証』第四図、『北裔図説集覽備攷』所収図の原拠であるとともに、「新訂万国全図」の主要資料であったため、「新訂万国全図」上の当時新発見の土地の記載をとりあげて比較吟味を行なう必要があろう。その試みはやがて、アロウスマス原図の刊年にまで問題がひろがるはずであるからである。

そこで「新訂万国全図」にみえる記載から二つのものをとりあげてみる。第一はウェーク島の記載であり、第二はオーストラリアとタスマニアとの分離である。ウェーク島はC₄図にも注記を異にしながら島影はあらわれており、またタスマニア島もはっきり分離して独立の島として描かれる。

第一のウェーク島からまず検討してみよう。この島について、「新訂万国全図」はC₄図とほぼ相あたる経緯度に位置を与えている。しかし「新訂万国全図」のウェーク島に関する注記は「安永八年西洋人ワケ始見ノ島」と記しているのに対してC₄図には「この島はウェーク船長によって一七九四年ハワイから中国への航海の途中に発見された云々」と記される^①。安永八年は一七七九年に当り、この両図はウェーク島の発見年を異にするのである。

さきに高橋景保が『北夷考証』において、その第四図の原拠図、——それはとりもなおさず「新訂万国全図」の主要資料のだが——を一七八〇年製と記していることは前述した。これは恐らくC₄図タイトル末尾に記されるクック航海の最後の年を刊年と誤ったものと判断される。安永八年は一七八〇年の前年にあたる。図上の要素はすべて一七八〇年以前に整合されねばならないからである。そしてウェーク島の北方をクックの一七七九年の航跡が通過するために無理にこれに合せて安永八年（一七七九）の発見としたのである。「西洋人ワケ」というのは Captain Wake の名前をオランダ読みにしただけのことである。一七七九年発見ならばクックの発見としなければならず、この発見年と発見者の名前と整合に悩まされたであろう製作者たちの苦衷が偲ばれる。もちろん当時のオランダ通辞や蘭学に関係した人達の英語力の問題にかかわるのも事実であらう^②。

これまで調査してきたアロウスマス原図の復原の地図的要素はほとんどすべてC₄図と適合するものであったが、ここに



第8図 A CHART of BASS'S STRAIT between New South Wales and Van Diemen's Land Explored by MATTw. FLINDERS, 1800.
アロウスマス「バス海峡ならびファン・ディーメンズランド海図」（1800年）
ドイツ国立図書館蔵

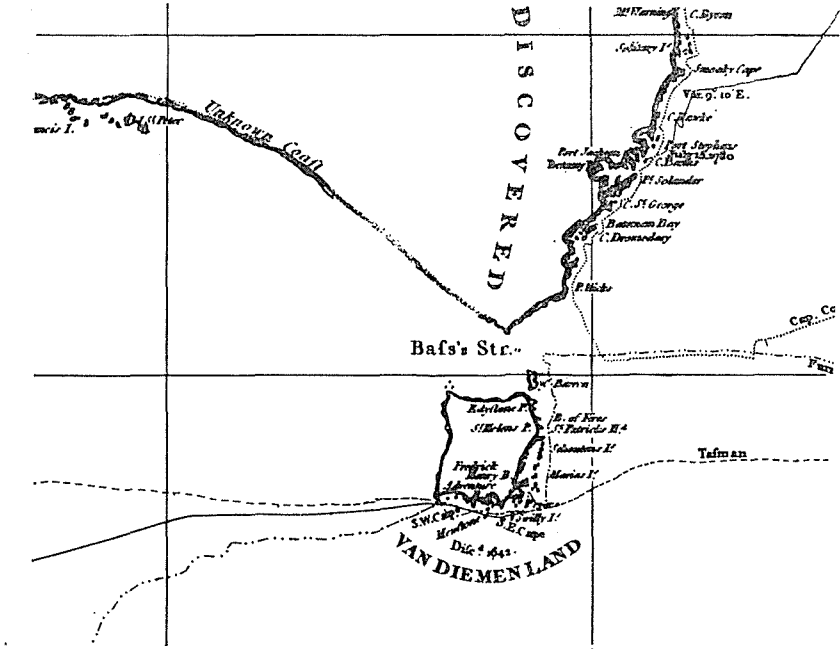
至ってウェーク島の発見年で齟齬をきたしているのである。ウェーク島はウェーク船長によって、一七九四年望見によって知られるようになり、一七九六年はじめて到達された。アロウスマス図ではC₃図に一七九四年の件のことについて注記があり、またP₂図に一七九六年の件のことについて注記される。通常の地名辞書や百科事典類は一七九六年を発見年とするのが普通である。したがってウェーク島の発見年は高橋景保等「新訂万国全図」作成者たちの明白な誤ということになる。そしてもし、C₄図が一七九四年発見の記事をふくむことによって、それ以降の作品となるとすると、直ちに前述の芦田伊人教授のアロウスマス原図の一七九〇年説^③と矛盾することになる。そして、さらに刊年について踏込むと、「考証図」

「図説図」④⑤とC₄図の日本北辺の輪郭がラペルーズ図型のそれを描くことによつて、ラペルーズ図帳の刊行される以後となり、そしてまたクルーゼンシュテルンがクロンシュタットを発する一八〇三年八月七日以前ということになる。ここで、もう一つの刊年決定の根拠となるのが第二のオーストラリアとタスマニアの分離の問題である。この分離は通常一七九八年のバスの発見にはじまるとされる。

ところで、前述のバス海峡海図は、「一七九八、九年、ハンター総督の命によつてフリンダースによつて探検された……バス海峡の海図」とタイトルに記されるように、一七九八年のバスの航跡と、一七九八年より九九年に及ぶフリンダースのタスマニア周辺の航跡をふくむもので、一八〇〇年六月一六日の刊行である。

その示す範囲はオーストラリア大陸側は、東経一四九度五〇分、南緯三七度一〇分の Two Fold Bay から西方へ、東経一一六度、南緯三八度一五分の Western Port までそれに心臟型のタスマニア全島である。

ところで、C₄図のオーストラリア大陸は西端を東経一六四度で限られる図が、左下辺に一つと、大陸全体の輪郭を示す図が右下辺に一つあらわれ、これは前者が西部を欠くだけでとくにとりたてて相互に差異を示していない。C₄図のオーストラリアで、バス海峡に面するオーストラリア沿岸をみると、バス海峡海図にみえる現在のメルボルン南東にあたるバスの探検の西端 Western Port の湾入は見当らず、西方へオーストラリア南岸中央部まで、クックの海図と類似の海岸線



第9図 アロウスマス「メルカトル図法による世界海図」(C₄図)のオーストラリア・タスマニア部分
フランス国立図書館蔵

が示されて“Unknown Coast”と注せられる。^⑤
 またタスマニア島は、C₄図においては、ことにその北岸・西岸において顕著な比較的単調な海岸線に囲まれ、概観的にみるならば東西を短辺とする矩形に近似した輪郭を有し、B図にみるような北岸中央部が凹状になり、かつ南に向うに従って東西幅を減じ、さらに南東部に湾入を示す南東部分を欠失した心臓型とは異なり、相互のスケールの差を考慮してもその輪郭の差異は明白に認められる。

そして、C₄図のこの島に接近する航跡は、南岸に接近して一六四三年のタスマン、一七七三年のフルノウのそれが見出されるのみで、北岸・西岸に接近した航跡は「Bass's Str.」の名称の見出されるにもかかわらず何等記されていないのである。

つまり、C₄図はアロウスマスというB図の著者と同一著者の手に成りながら、B図を忠実に反映しているとはいえない難い面が認められる。このことは正確

な一八〇〇年公刊の正式海図の稿図が検討される以前に、おそらくはフリンダースの一七九九年に終る探検の成果をふくまないバスによる探検成果、すなわちタスマニアがオーストラリアから分離した島だとする概念的な情報を何等かの手段によって獲得し、これによってC₃図を修正したものと考えられる。なぜなら、C₄図にはバスの一七九八年に終る探検の航跡、フリンダースの一七九九年に終るタスマニア島周囲の航跡のどちらも示されないままにバス海峡とその名称が示されるからである。

ここでC₄図刊年の見当をつけるために、参考とすべきアロウスマニス作成の他のシリーズにおける日本北辺・タスマニアの表現の変化する時期を検討してみよう。各シリーズでこの時期、日本北辺がラペルーズ型をとるものなかで、タスマニアの分離・非分離をしらべると

一 M系列

M₂〔一七九九年訂補〕日本北辺はラペルーズ図型。タスマニアは分離せず。

M₃〔一七九九年訂補〕日本北辺はラペルーズ型。タスマニアは分離。

二 P系列

P₁〔一七九八年〕日本北辺はラペルーズ図型。タスマニアは分離せず。

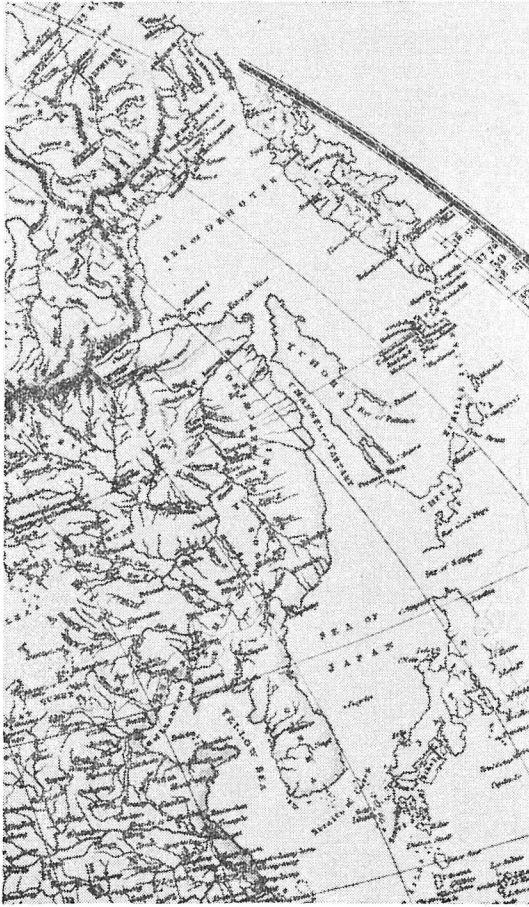
P₂〔一八〇〇年訂補〕日本北辺はラペルーズ図型。タスマニア分離。

三 R系列

R₁〔一七九八年〕日本北辺はラペルーズ型。タスマニア分離せず。

R₂〔一七九八年〕日本北辺はラペルーズ型。タスマニア分離。

となる。つまり、M系列のM₂・M₃、R系列のR₁・R₂と同刊年を示すものなかに異なった型を示すものが存在していることが判明する。これは一七九八年にラペルーズ海図帳の出現によって日本北辺は一斉に変化したラペルーズ海図帳では



第10図 MAP of the WORLD on a GLOBULAR PROJECTION, 1799. アロウスマス「グローブラー図法による世界地図」(1799年) フランス国立図書館蔵

まだタスマニアは分離していなかったため、まず日本北辺のみをラペルーズ図型に変え、タスマニアを非分離の形そのままにして刊行され、それ以後の段階においてタスマニアを分離せしめてもう一度刊行したものに外ならない。

さらにつめると、 $R_1 \cdot R_2$ 図はともに一七九八年一月一日の刊記、 $M_2 \cdot M_3$ 図は最初の版の刊記一七九四年（二月一日）に“addition to 1799.”と補われている。通常、版の準備は刊行日以前におこなわれ、刊行日直前に出来上るわけで、形式的には刊記月日通りの刊行ということになるが、この場合、実際には R_1 図が刊行の月日以前か刊記と同日、 R_2 図が刊記の月日の直前か同日か、場合によってはそれ以後となり、いずれにしても R_2 図は R_1 図に比べておくれた刊行によることは否定できない。

一方、 M_2 図は“addition to 1799.”と刊記にありながら、ラペルーズ図型の日本北辺と非分離のタスマニアを同居させている。ライデン大学図書館のこの図が中央上部のタイトル、同下部の献辞などきわめて整った図であるため、タスマニア部分が、 M_1 図の一片の錯葉によって M_2 図の部分となつているとは思われな

い。

右のことから、タスマニアの非分離から分離への転換は、R₂図の出現する一七九八年一月一日前後と、M₃図の出現する一七九九年の或時期ということになる。M₃図の出現時期の最も早い場合を考えるとM系列の最初の版、M₁図が一七九四年一月一日の刊記を有し、もしこれが五年後の月日を同じくしてM₂図の刊行が予定され、タスマニア分離の情報によってM₃図に急遽改められるような事態が存したとすれば、その準備期に当る一七九八年の末頃に転換の時期があったことにもなる。そして、この転換が、まずR系列において起っていることも他に比べてシンプルな転換しやすい図の内容であるという理由において当然であったと考えられる。

形式的にいえば、一七九八年一月一日から、一七九九年の末日までに図上においてタスマニアの分離という転換が行なわれたことになる。そして、同じく世界図であるC₄図もM₃図と同じく一七九九年の或時期にタスマニアを分離させて刊行されたと推定できるように思う。

M₃図では、タイトル下辺に一七九四年の刊記に付して、その上に“*addition to 1799*”と記している。当初筆者はこれを一七九九年版の補訂と解していたが、『大英図書館印刷地図目録』はこれを刊年として取扱っている。この体例に倣うと、一七九四年版を一七九九年に補訂した図ということになる。R₂図の如く一七九八年一月一日の刊記をもつタスマニア分離を示す図が存在することからも、このような扱いでよいのであろうと考える。

右の検討の結果、日本北辺のラペルーズ図型、タスマニアの分離をふくむ同一著者による世界図としての共通性から、C₄図の刊年をM₃図の刊年と並行させて考えることは無理ではなく、さらに慎重にR₂図の刊記に示される一七九八年一月一日以後、バス海峡海図の出版される一八〇〇年六月一日までの一七九九年を中心とした或時期と考えることは許されて然るべきと考える。

なお、これらのタスマニアの分離を示す図に記されるアロウスマイスの住所（事務所・工房・自宅のいずれかは不明）が、い

すれもそれまでの Charles street, Soho square から No. 24 Rathbone Place に変化しており、アロウスマス自身の生活もこの時期何等かの変化が存したはずである。

C₄ 図の基本要素が一応明らかに became のので、簡単に作成者アロウスマスの経歴について触れておこう。^⑥

彼は一七五〇年七月一日、イングランドはデラムシャーのウインストンに生れた。一七七〇年頃ロンドンに出て地図・測量・銅版技術などを習得し、そのすぐれた技術によって王室水路測量官となった。当時世界の各地で活躍していた航海者からの新発見の報告や他の地理的資料による龐大な情報量の蓄積と高度の技術によって、前述のメルカトル図法による世界海図(一七九〇)はじめ、スコットランド地図(一八〇七)、南インド地図帳(一八二二)など約一三〇点の地図を作成し、ヨーロッパにおいて高い名声を博した。他方彼は地図製作事業を家族企業に育てあげるのに手腕をあらわし、この事業を子息アロンと甥ジョンに任せた。アロンは学校地図帳や地理学のマニユエルの出版で著名となり、ジョンはロンドン地図帳や王立地理学会の創設者のメンバーの一人として知られ、彼の指導の下で、この家族の地図出版事業は大きく進展したという。一八二三年四月二三日ロンドンに没した。享年七十二歳。

① An Island discovered by Capt. Wake, / going from Owyhnee to China 1794, / 15 miles long & 4 broad saw no inhabitant.

② この点については拙稿「ウエーク島の登場―『新訂万国全図』原図問題に関連して―『古地図研究』第一〇〇号、一九七八年参照。

③ ちょうてこの時期、文化六年(一八〇九年)『新撰洋学年表』は和蘭通辞に魯・英語の兼習が命ぜられたことを記している。

④ 芦田教授論文については本稿6頁注①参照。

⑤ この辺りの時間的な情報の流れに関する資料は目下のところ筆者の手許にはない。従って情報伝達の時間的経過については、常識的推測にたよる外はない。

⑥ バス、フリンダースの発見については

R. A. Skelton, *Explorers' Maps, Chapters in the Cartographic Record of Geographical Discovery, 1960*, p. 245

H. R. Frits (Ed.) *The Pacific Basin, A History of Its Geographical Exploration. AMERICAN GEOGRAPHICAL SOCIETY Special publication No. 38, 1967*, pp. 247, 251.

⑦ タックはオーストラリア南岸の西方部分に“Land of Peter Nuty's discd. 1627.”と記している。

⑧ 彼の伝記としてまとまった研究は目下のところ全くない。研究者がまったくないわけではないのだが、その研究は未発表である。したがって止むを得ないので、つぎの人名辞書をたよりに、これを要約して一応の見透しを得たい。

R. V. Tooley, *Maps and Map Makers*, 1970.
Dictionnaire Général de Biographie et d'histoire, de mythologie, de géographie ancienne et Moderne Comparée, des antiquités et des institutions, Grecques Romains, Françaises et Étrangères, 1895.

J. Thomas, *Universal Pronouncing Dictionary of Biography and Mythology*, 1930.
C. I. Barnhart (Ed.), *The New Century Cyclopedia of Names*, 1954.

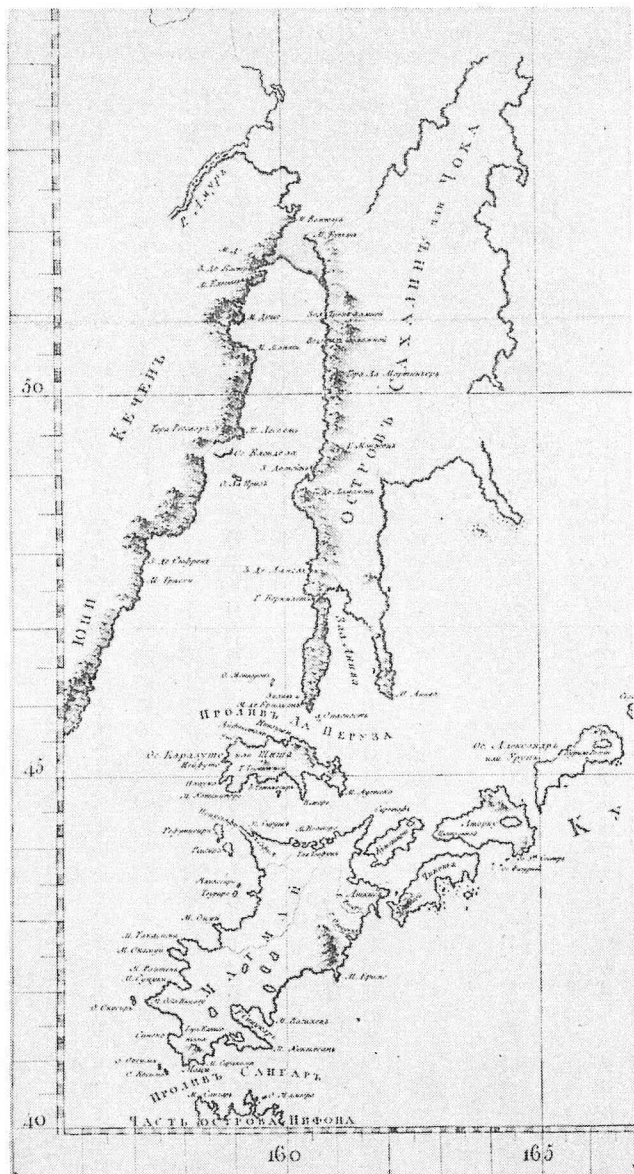
七 ロシアにおける仿製図の可能性・その他

ところで、この地図はレザノフ来朝の際にもたらされたものであった。そこで前述のアロウスマス世界海図すなわちC₄図がアロウスマス原図のロシアにおける仿製図ではないかという可能性を念のために検討してみよう。

筆者蒐集の写真資料の一つに「数年来企てられた太平洋・氷海におけるロシア人航海者による海洋発見の地図」^①なるロシア製の一図があり、それには一八〇二年皇帝の秘庫の地図を資料として外国航海者最新の観測に従って製作・彫製されたことを記している。所収の範囲は、東は北米西岸をふくみ、南は太平洋上の北緯四〇度まで、西は黒龍江下流部をふくんで朝鮮は除かれ、北はアジア大陸の北極海海岸線を完全に包含する。東西各二枚の四枚組より成り、メルカトル図法により、経緯度ともに五度間隔で引線される。

いまこの図の日本の北辺をみると、そのカラフトは完全なラペルーズ型を示している。サガリンの南には一小島があり「カラフト或はシマ」と島名を記し、さらにその南に「マツマイ」島が描かれる。そしてこの南の二島は一七九三年頃とされる松前藩医加藤寿の「松前地図」の輪郭ほどんどそのままと言ってよい。そしてラペルーズ型のカラフトに加うるに加藤型のカラフト・マツマイという類型で描かれるこの地図は、結果的には完全なカラフト二島説によって描かれる図と同様な姿を呈示する。

ところで、ロシア図のラペルーズ型のカラフト島部分はアロウスマスの一七九八年・一八〇八年の太平洋図のカラフト



第11図 КАРТА морскихъ открытийъ российскими мореплавателями на Тихомь и Ледвнтомь моряхъ въ разныхъ годахъ учиненныхъ 1802го года.『数年来企てられた太平洋ならびに氷海におけるロシア人航海者による海洋発見の地図』（1802年）英国国立図書館蔵

とその輪郭・スケールを同じくして完全に重なり合う。しかし、カムチャツカ半島・千島列島・オホーツク海沿岸などの部分は、アロウスミスの太平洋海図とは明らかに異なるものである。さらにアロウスミス図がグリニチ初度の経度であるのに対してこれと異なる基準経度をとるのである。

これらことは、第一にアロウスミスの一七九八年刊太平洋図のカラフト部分の敷き写しの跡を歴然とさせており、第二

にはカムチャツカ・千島・オホーツク海北部・中部に対するロシアの地理的知識に関する満々たる自信を示しており、この認識の上立って、アロウスマス太平洋海図を改変しているのである。第三に現今の北海道・南千島方面で加藤図型を採用している点、第一のカラフトにおけるラペルーズ型の採用とともにこの地域もまたロシア人にとって尙正確に知られることのすくなかったことを示すものと思われる。そして第四にこの図の輪郭こそレザノフを搭乘させてきたクルーゼンシュテルン艦長麾下のナデジユダ号がクロンシュタットを出港する前後における日本北辺についてのロシア最新の地理的知識であったのである。一八〇二年といえばこの翌年八月七日ナデジユダ号は錨をあげるのである。あるいは北太平洋に乗出す彼等のためにこの地図はつくられたものかもしれない。

クルーゼンシュテルンの航海記には、太平洋中の航海のくだりで、アロウスマス「太平洋海図」について、九枚組・一枚ものの兩種とも述べた箇所が見出されるが、世界海図についての言及はない。航海記が局部の移動の記述になるため、「太平洋海図」の如き部分を扱うものを参照するのが便利であったためかも知れない。

他方ナデジユダ号の書庫は大層充実していたようで同航海記には、

必要な海図は周到に蒐められて整理せられてあり、書庫には賢明な選択を経た書籍がおさめられて居たので、此等の点に関して予は何らそれ以上を望む必要がなかった。(羽仁五郎記)

と述べているように、ほとんど完璧に近い航海資料の蒐集の存在していたことが示されている。イギリスに六年間も滞在し、艦隊勤務の経験もあるクルーゼンシュテルン艦長が、つい二、三年前のアロウスマス世界海図をのせずに出発したとする蓋然性はむしろ低いとすべきであろう。

そして本木庄左衛門は『彙輯北裔図説集覽備攷』の説明において記すように「文化元年魯西亜国ノ使節入貢ノ日ニアタリテ齎シ到レル」この図を「私ニ請得」たのである。ロシア艦はたしかにこの図をのせて長崎にやってきたのである。『北夷考証』は「譜厄里亜国アルロウスマットナル者新製輿地図」といい、『彙輯北裔図説集覽備攷』には「譜厄里亜国

撰海上全図」となっている。また高橋景保より間重富への書簡にはこの図について「庄左衛門差出候エンゲルス図」とはつきりイギリス製とし、その他の国で仿製された地図であるとするには余りにも判然とイギリス図であることを述べている。前述の如く「図説図」③には CHANNEL OF TARTARY 以下数箇の英語スペルによる地理的名称がふくまれていた。

また前述「新訂万国全図」にみえるウエーク島は「西洋人ワケ始見」の島と注記されていた。もしロシアにおける仿製ロシア語訳図がもたになっていなければならないならば、ウエークに対してロシア語“yefic” [ueik] の片仮名訳表記が当てられている筈で、「ウ・エ・イ・ク・始見」の島となっていた筈である。アロウスミス図がロシアにおける仿製図であったとするには無理があるように考えるわけである。

そして「庄左衛門差出候エンゲルス図」④なる表現には、ほとんど原図の面影すらみとれるような感がある。

訳図については、現存のものは部分図のみで『北夷考証』所収図の場合、原図のわずかの省略を伴う原寸の写図であり、『輿輯北裔図説通備攷』所収図は地名を全く、あるいは大きく欠き、航路が加わり、それに上端に経度目盛がそえられる。しかし、経度数の表示を欠いてはおり、意を以て山田が略したかどうかは明らかでない。⑤

終りに、レザノフ来朝の際、送還されて帰ってきた津太夫一行のもたらした『環海異聞』図の検討を行いたい。それはわが国に入ってきた状況とともに、図がらにおいて、左右両方にアロウスミス世界海図同様日本附近が描かれ、彼らの乗艦が出港以来辿った航路が記載されていたからである。

いま両図を比較すると、所収範囲において、アロウスミス世界海図が左端を朝鮮半島を東西にわかつ中心線からオーストラリアを分断する線で限られているのに対し、『環海異聞』図は、北はタイミル半島西側で、南は不明確ながらインドシナ半島あるいはマレー半島より西で限られており、さらにその南ではオーストラリア大陸を示さない。右端では、アロウスミス世界海図がカムチャッカ半島基部より、オーストラリア・ニュージーランド間の海洋中で切断されてニュージーランドをふくまぬのに対し、『環海異聞』図はアジア北東端のすべてをふくみ、またニュージーランドを包摂している。⑥

さらに『環海異聞』図および同図に近縁の系統の図ではタスマニア島はオーストラリアから分離しておらず、北極海ではノバヤゼムリアは一島をなしたままで、アラスカ半島はその姿をみない。『環海異聞』図および近縁の図がごく疎略な写図のため、詳細に論ずることは却って事態を正確に把握することに通じないように考えるので概略に止めるが、すでにこのようなレベルでの両者の差異があり、これらの図の原図とアロウスマミスC₄図とは異なるように思う。

この『環海異聞』図の原図については、同書に漂流民の帶來したベテルブルグ版の方図四枚より成る図と記されていた。アロウスマミス世界海図はその地図の部分のみで銅版八枚よりなるものだったのである。^⑦

① Карта / морских открытій / российских мореплавателей / на Тихомъ и Ледяномъ моряхъ / въ разныя годы / учиненныхъ / при собственномъ / Его Императорскаго Величества / депо картъ / сочинена и по новѣйшимъ наблюденіямъ / иностранныхъ мореходцовъ. Выпущена / и исправлена 1802го года.

② 高倉信一郎・柴田定吉「我国北海道本島地図の変遷―北日本地図作製史第四報―」『北方文化研究報告』第六集、一九四二年、一一―一二頁。なお近年同教授等によって編せられた古地図集『北方領土』一九七一年刊では寛政五年頃という作成年が与えられている。またラックスマン渡米の際の地図の交流については秋月俊幸「蝦夷地に伝わったロシア地図」『えうろ』第二号、一九七五年がある。

③ 羽仁五郎訳注『クルウゼンシュテルン日本紀行』上巻、一九三二年、六四頁。

④ 文化六年五月九日付高橋景保より間重富宛書簡追伸にみえる。資料は一七頁注①参照。「嘉永二年酉八月阿蘭陀通詞目付本木昌左衛門書上由緒書」によれば、本木昌左衛門の父庄左衛門は「文化元年、阿蘭陀献上物附添被仰付」、さらに文化五年にも同じく阿蘭陀献上物附添として出府し、六月以降浅草天文台に引移って同所において万国地図

和解井和蘭軍艦図解等を仰付けられ滞りなくこれを勤めて、同年十二月帰郷している。もし、右の万国地図がここにいる「庄左衛門差出候エンゲルス図」であるならば、英国製の原図が存在し、かつその訳図も本木庄左衛門によって作成されていたことになる。ただし、且下のところ筆者の研究段階では原図ならびに原図全面にわたる訳図の現物資料を欠くので判断はなお保留する。

⑤ 三二頁注①参照。

⑥ 『環海異聞』図の近縁図で、その東西両端をこれと同じくしないもの若干があるが、いずれもアロウスマミスC₄図とその範囲を異にする。

⑦ 『環海異聞』巻二一、『北門叢書』本九九―一〇〇頁。

なお、ここにも見える漂流民の彼らの帰來航路を記した方図四枚を間重富が校訂して、「別に繪界全圖を製し」た「曆局新製校定海路全圖」というものは、C₄図の原図または模写図のいずれかが基礎図として用いられた可能性が考えられる。なぜなら、「官物御蔵のアルロウスマット図」(『北夷考証』)には、「図説図」④に示されるようにナデジユダ号の航跡が正確に記されており、C₄図の上辺、下辺には正確なスケール・距離等の測定資料も付せられており、漂流民将来図の校訂には絶好の条件を有するからである。

むすび

以上わが国現存のアロウスマス世界図の部分筆写資料とその関連文献の地図的要素を確定して、それを西欧に蔵せられる世界海図にもとめて一応の結論を見出した。そしてこれを主要資料としてつくりあげられた「新訂万国全図」は筆者がかつて述べたように中国資料をもまた包摂していたのである。伊能の日本におけるすぐれた業績や、間宮の北辺における苦闘のトロフィーを含むことまた無論であった。経緯線というきわめてシンブルな軌範のもとに語りかけられたこの世界の姿こそ、「文化の地理学」が世界を「地理的ランガーージュ」として捉え、かつそれを表白したモニュメントであった。

いま「新訂万国全図」の主要資料アロウスマス世界海図を一応検討し終えて、この図が西欧においてもまたクック以来の卓抜した航海・測量などの伝統に支えられたイギリスで作成され、しかも筆者の考証に示したように当時最新の地理的知識によって構成されている姿を垣間見た。

一方、わが国において、高橋景保を中心とする天文方を中心とする一群のひとびとはこれをどのように認識していたのであろうか。つぎの『北夷考証』の一文は端的にこれをあらわしている。すなわち、このアロウスマス世界海図について、

古今舶来諸地図中コレヨリ精ナルハナク、又新製ナルハナシ。何ントナレバ、從來不分明又未審ノ地方ノ如キモ尽ク明瞭シ、其航海・実験セシモノハ其行海ノ針路ヲ引線シ、其年月ヲ傍記シ、各土地形ノ出没・方位等ヲ改正スルノ類、其詳ナル事ヲ計フベカラズ。実ニ古今独歩ノ精図ナリ〔注略〕宜ナリ、諸厄里亞人ハ歐邏巴洲中ニ於テ殊ニ航海術ニ專精ナル事、他方コレニ法ルモノ多シ云々

とこの事実を正確に認識していた。かかる基本的認識の上にこのすぐれた地図を受容し、東方の地理的知識をもって付加修正して成った「新訂万国全図」が、国際的にみても第一流のものとなったのは当然であったと言ってよい。文化年間の歴史的位置が、自立的文化要素と外来文化要素の統合の上に立つ国際社会への参加の準備の時代であったとすれば、アロウスマスの世界海図を主要資料として成った「新訂万国全図」こそ地理学の分野において「文化の時代」を象徴するに足

る作品だったと評価しうるのである。

そして、高橋景保をはじめとする一群のトレーガーのなかに森林太郎のいわゆる近世の「二本足」の学者の姿をみる思^①がする。この理念は明治以来、戦前はむろん、戦後にいたるまでも知識人の世界の底流にある巨大な流れであった。「文化の地理学」は現在のわれわれにも直接につながる問題を提起しているといわねばならない。

はじめ本稿ではアロウスマス世界図が、「新訂万国全図」の重要資料として、どのように転生するか、あるいは校閲のための他の諸国といかに比較・検討・評価されたかを論ずる予定であった。しかし筆者に与えられた紙幅と時間はすでに尽きてしまった。機会を得て稿を新たにたく考える。博雅の示教を得たく思うゆえんである。

① 森林太郎「鼎軒先生」『東京経済雑誌』第六三巻、一五九一号。

〔『鼎軒田口博士七回忌記念号』一九一一年。また『森岡外全集』(岩波書店版)第二六巻、一九七三年、四二一—四三三頁。〕

在外研究中、好意ある示教と資料蒐集等に援助を得た Professor

C. Koeman, Dr. G. Schilder, Dr. D. De Vries, Dr. H. Wallis,

Dr. L. Zegener, Dr. W. Wan, Dr. E. Klump, M. E. Pognon, Mlle.

M. de la Ronsière, M. J. Palodi, Professor, J. Stephan, Dr. M.

Matsui, 英仏両国滞在庶務を賜った Dr. J. Neeham,

Dr. G. Lu, Professor M. Chisholm, Professor P. Dentiéville, Professor M. Soyrie の各位に深甚の謝意を表すものがある。さらに予備的な資料の報告や写真の依頼を煩をいとわす行っていたた福井保氏・石山洋氏・藤原利一郎教授・高橋正氏の好意に対して謝意を表すことむろんである。

なお、本稿は京都大学文学部水津一朗教授を代表者とする文部省科学研究費総合研究A「地理的ランカーシマ(表現とその手段)」の思想史—その東西比較—の研究分担にこなせる報告である。

〔補記〕 C 図下辺緯度目盛内側には London, Published as the Acts April 1st 1790 があり、欄外には London, Published as the Act directs April 1st 1790 がある。

他方、一七九四年以後とされる C 図、一七九八—九九年とされる C 図の下辺欄外には London, Published as the Act directs April 1st 1790、と記されている。これ等の地図に描かれる航跡の最新のものは一七八九年の Scarboroughs の航跡であるが、この C 図の作成は一七九〇年四月以降であり、C 図にもこれが残るのは、一七九〇年四月一日の法令に従ってこの図が作られていることを示すものと理解すれば矛盾なく解せられる。

(奈良女子大学文学部教授)

The Original Map of Arrowsmith as a Main Source of
'*Shintei Bankoku Zenzu*' 「新訂万国全図」 (Revised Map
of the World)

by

Akio Funakoshi

Modern geography in Japan, the author considers, emerged in the early 1800's. '*Shintei Bankoku Zenzu*', a representative work of the era, was an integrated result of the wide collecting of Chinese and European sources and, in addition, of the scientific investigation for proper land of Japan and of the explorations which they had been attempting so as to obtain geographical informations of northern *terra incognita*. In it is observed not only their passive acceptance of Chinese and European knowledge, but also the active engagement accompanied by their own '*langage de la géographie*'.

The author intends in this article to throw light on the date of publishing of A. Arrowsmith's map, which was a main source of '*Shintei Bankoku Zenzu*', investigating into the cartographic elements of an extant Japanese translation of that map of the part north to Japan, that is the Sea of Okhotsk and Kamchatka, with its explanation, then to set forth the fact that scholars in Japan had already realized a remarkable '*langage de la géographie*' on the world more than a half century before the *Meiji* 明治 Restoration.

Le mouvement de la paix et la monarchie capétienne du XIIe siècle

par

Atushi Egawa

Il y a plusieurs études qui analysent la succession du mouvement de la paix par les pouvoirs des princes territoriaux; mais beaucoup d'entre elles s'inclinent à la vision très juridique. Cette étude vise à interpréter la relation politique entre ce mouvement et la monarchie capétienne du XIIe siècle.